

川柳の雑記



麻生路郎 ☆ 主宰

九月号

No. 424

Pensoj flugas trans la land - liron
THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

本社川柳忌句会

10月本社句会

・兼題・
腰 片 後
棒 聲 乗
り 越 し

柳翁をしのんで

一人でも多く出席いたしませう。

日時 九月七日(金)午後六時

会場 自安寺 (211) 一四七八番

大阪市南区千日前電停東スグ北側

兼題 「空・白」(三題) 麻生路郎選

(路郎選に限り七時半切)

「骨」(三題) 菊沢小松園選

「ホルモン」(三題) 黒川紫香選

「替え玉」(三題) 西いわを選

席題 三題(当日発表)

柳話 中島生々庵

呈賞 安谷暹天位・安谷暹天位から路郎選により不巧

副賞

会費 百円

幹事 柴合・いきむ・南宗・文秋・庸佑・八郎・与呂

志・清人・水洞・すむ・萬風子・柳宏子・舟

遊・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円

同封(切九月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪六〇八

大阪市民文化祭第14回川柳大会

恒例による大阪市民文化祭の川柳大会は左の通り第十四回を迎えるに至りました。初心者の方々も多数投句されますよう、おすめください。又どなたも出句の有無にかかわらずご来場の程お待ちいたします。

主催 大阪市、大阪市教委
関西短詩文学連盟
後援 毎日新聞社

日時 昭和37年10月13日(土)

会場 毎日新聞大阪本社講堂(市電桜橋)

開会の辞 西尾 栗

挨拶 武田 北人

同演 大阪市教育委員会

講演 関西短詩文学連盟 麻生路郎

席題 病又と川柳 北川春葉

兼題 二題(当日発表)

余興 「借用」 堀口塊人選

「棧橋」 中島生々庵選

「出世」 石井黙平選

「マクシエアワー」 川村好郎選

バイオリン演奏 C.M.C.児童音楽サークル

閉会の辞 節間 杏花

川柳賞 室・兼題優秀句に大阪市長・教育委員長から文化祭川柳賞を贈呈。

兼題投句 各題毎にはがき型句箋及び官製ガキ一枚

に二句ずつ、裏面に住所・姓名・推挙を明

記。大阪市北区中之島、大阪府教委内

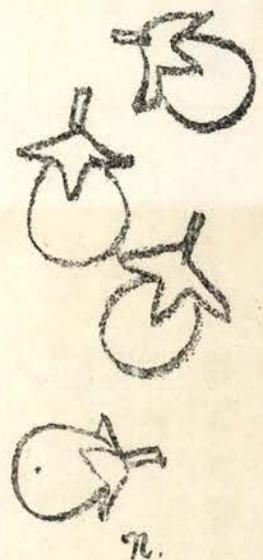
文化祭川柳大会係宛(九月三十日着限り)

切)

入選句集 希望者に頒布(五円、郵券可)

不朽洞句帖

麻 生 路 郎



長靴にふまれてマクロ荷揚げされ
貨物船が修学旅行を吐き出した

薄出温泉

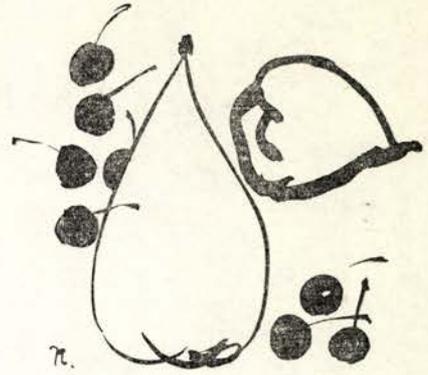
ロケに来たように浅虫歩いて来

林屋

十和田湖よ みな酒になれ旅人へ
甲子園へ出たと言うのが会社に着
ラジオ体操に使われビヤノ味気なく
見渡すかぎり土地持つていてケチケチし
パーカーもサインの外に用がなく
又秋か何処まで続くさびしさか
停年退職少し太ったように言う

川柳雑誌九月号目次

不朽洞句帖	題字：麻生路郎・表紙：野尻弘	3
秋風上月城跡	東野大八	12
北方の感激	工藤甲吉	14
東京の一夕	高須啞三 塚越迷亭	16
随想	長谷川三司	25
句評リレー	梅志・清生 白星	26
道草(八日間の旅)	麻生路郎	18
女の世界	水谷竹荘	31
課題は打者・作者は投手	酒井ひか平	20
名句と難句	麻生路郎	4
調停裁判官と川柳	今西生蕪	32
★現代柳人録	★川柳書架	33
私の秘密	福井野迷路 山川阿茶	2928
大万川柳「口癖」発表	富士野鞍馬	40
松風・村雨	中村九呂平	30
★踊りと川柳	★軸吟について	25
藤井米三翁逝く	生童	22
不朽洞の人々	(西川晃氏)	39
★		
川柳塔	麻生路郎選	6
同舟近詠	諸家	11
近作柳樽	麻生路郎選	20
金泥集	北川春葉選	35
各地柳壇	麻生夙乃選	41
★柳界展望	★飛燕往来	38
一路集	「つぶし値」	46
「PTA」	正本水客選	36
「料理屋」	石川侃流洞選	37
★柳梅窓	橘高薫風子選	46
▼	★パンの散歩	46



川柳 名句と難句

麻生路郎

有名となった。大正七年には箏曲の米川親敏夫妻と当時の露都ベトログラードに行つて尺八演奏旅行をした尺八界の長老であったが昨年だったか、一昨年だったかに亡くなられた。

座談会ではこの辺でビール出る

(甲吉)

座談会を打ち切るのも、司会者の一つの技術だ。

「ではこの辺で……」

と言う、きまり文句が、いつとはなしに生れ、この言葉が終わるか終らぬうちに、ビールが出るのも定石である。

淡々たる表現ではあるが、情景がほうふつとして眼に迫まるではないか。

〔三七二〕

うちの妻 病氣するとは知らなんだ

(旭童)

朝早くから——夜遅くまで、てんてこてんてこ動きまわる働き手の妻だった。毎日見ていると、それがあたりまえの妻であつて、特に夫を感激させなかつたのであつた。しかし、一ッたん寝つかれて見て、夫は愕然としたのであつた。

夫はハラハラと落涙して、病める妻の手をかたく握りしめたことであろう。

〔三七三〕

鶯が鳴かぬ自由をもっていた

(綾美)

一つの籠の中を天地として、鶯は毎日のように鳴き続けた。

〔三六七〕
火を踏んだようにツイストさわぎ

たて

(愛鳩)

相手の身体に手をふれないで、脚や腰をねじる煽情な踊りがツイストであるが、それを「火を踏んだように」「さわぎたて」と観たのは実に、そのものズバリと言つていいだろう。「ように」の形容もここまで来ると感歎の外なしと言いたい。

この踊りは特定のステップを踏まないでいいし、ジャズにも、ラテン音楽にも、カリブソやマンボにも合せられるそうだから感情のおもむくままに踊れる自由さが他の踊りより幅が広いわけだ。本来は歌の曲名で、アメリカの黒人歌手チャビー・チェッカーが歌いまくり、一九六一年ごろから爆発的な流行を見たのである。

〔三六八〕

繖を持つのが阿呆らしい程ひらけ

(水洞)

鼻の先きを電車が通る。ダンプカーが突っ

ぱしる。きのうまで田圃や畑だったところへ、クンケン工場が建つ。知らぬ間に、住宅が並び、タバコ屋が出来、赤いポストが立つ。百姓なんか阿呆らしくて、やつていられないと言ふのである。都会の近郊に住む農家の人たちの心理を巧みにつかんでい

〔三六九〕

口には出さぬが軍人墓地の広さ

(非井堂)

軍人でない人の感懐であろう。ひろびろとした軍人墓地の一角に立つて、あんまり広い墓地なので、職業軍人に對して一種の反感に似たものが心の底から湧きあがったのだ。

「口には出さぬが」の上八が、よく効いていると思う。皮肉な句だ。

〔三七〇〕

都山流 父ちゃん六段だけが得手

(独仙)
晩酌がすむと、縁側に出て、お父ちゃん

の尺八の演奏がはじまる。お得意は昔覚え

た六段の調べだ。家族たちは又六段かと思

うが、ここにこの句の軽い穿ち味があるの

である。

次に六段や、都山流のことを少しく解説

しておこう。

六段の調べは箏曲の一つで、八橋検校の

作曲したものである。全曲六段で、のちに

三味線や尺八などと合奏されたが、放送などでもよく使われている。かなり派手な曲なので初心者

は好んで習ったものだ。この句のお父ちゃんも、その一人であることは言うまでもない。

都山流は尺八の一派で、流祖は中尾都山である。都山は本名を琳三といった。大阪府枚方市に生れた。都山流は一八九六年に創始され、合奏法、記譜法、流政等に、進歩的な方法が採用されたので他流を圧して

しかし、いつのはどにか驚は鳴かなくなっていた。

私は驚が鳴くまで待つより仕方がなかった。私は驚にも、鳴かぬ自由のあることを知らされたのであった。

いいネライの句だ。口語調もびったりして胸をつく表現だ。

〔三七四〕

盆踊り私も熟していますのよ

(好 祐)

盆踊りのグループに交って、夜とともに情熱を燃やす少女の心情をあますところなく詠いあげているではないか。

口にはそれと出さないけれど、眼には「熟していますのよ」と訴えているのである。口語調が思う存分に飛躍している。

〔三七五〕

薫つかむ思いで強力加美の素

(多久志)

オレはまだ若いと思っている男に、頭髮が薄くなるくらいイライラさせるものはないらしい。薄くなるくらいなら、まだ辛抱も出来ようが、ソロソロ光り出すと矢も楯もたまたまなくなる。その弱点に応える毛生え薬は随分派山売りに出されているが、大して効果がないらしい。昔のことだが、毛生え薬の新聞広告に、美人の鼻下に、八の字の片方だけを描いたのがあった。この毛生え薬を塗ると毛のないところに、てきめん毛が生えると誇大広告をしたものだが、肝腎の発売所のオヤジの頭に一本の毛もなく、テカテカと光っているので笑いのタネをまいたことがあった。写真を撮るのに必ず帽

子を冠むって撮るといふ涙ぐましい話もあるので、よく効く毛生え薬だと聞くと、まだまされると知っていても、漏れる者が薬をもつかむ思いで買ってくるのである。この句はそうした心理を巧みに詠んでいる。「強力加美の素」はかなり高価な毛生液であるが、効果のほどは知らない。これとても、既に毛根のないテカテカ頭では施すすべもなからうから、気の毒ながら諦めるより仕方があるまい。

〔三七六〕

ドレミファソ親の欲はどうまくな

(清 人)

ピアノか、バイオリンか、楽器はあきらかでないが、洋楽を子どもに習らわせているのである。ところが娘にバイオリンをやせれば辻久子を夢むのが親の常だが、親の欲ほど巧くはないと、こどもの技術をけなすよりも、親の欲、親の甘さを諷した句である。

ドレミファソは洋楽の音階の呼称である。赤ん坊ぐらい敏感なものはない。おしっこが出たよと知らずのも泣くだけだし、飢も痛さも泣きの一手である。それで十分用が足りるから面白い。何を欲しているのか、その判断の正確さは母の外にはない。

〔三七七〕

乳臭れる声ではないと泣きやまず

(可 住)

赤ん坊ぐらい敏感なものはない。おしっこが出たよと知らずのも泣くだけだし、飢も痛さも泣きの一手である。それで十分用が足りるから面白い。何を欲しているのか、その判断の正確さは母の外にはない。

〔三七七〕

貧しさは螢を放つ庭もなし

(きさ子)

四帖半に三帖、そこへ親子五人の貧しい暮らした。裏は扉だ、庭らしい庭もない。せっかくならばもらってもそれを放し飼いで楽しむことも出来ないとなげたのである。長屋風景の一とコマカ。

〔三七九〕

赤電話へ折詰忘れて行かした

(どんたく)

「これから二次会だ。たのむぞ」と言つて男は電話を切るなり、ヒョロヒョロと立ち去った。

店番の娘が、何んの気なしに、赤電話へ眼を移すと、そこに折詰が忘れられていた。

「アラアラ、さっきのオジさんだわ」と言う情景を巧くとらえている。「行かした」は行かれたという大阪弁。

〔三八〇〕

女社長 でれでれするのが大嫌い

(知恵美)

「お酒を浴びるほど飲むのもいいが、変な眼使いなんか止して頂戴ッ。」と、女社長はなかなか手きびしい。自分でもデレデレしないが、デレデレされるのも大

きらいなのだ。この句、表現がキビキビしいので、いかにもM過剰型の女社長らしく詠まれている。

〔三八一〕

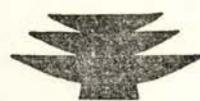
ありあまる生活へけちな

コレクシオン (宗太郎)

ありあまる暮らしをしてい

て、コレクシオンをしていると聞いたので、サソ立派なものを蒐めているのだろうと思つたが、自慢そうに見せてくれた蒐集品が、とてもケチくさいものだったので呆れたと言っているのである。

特にコレクシオンといえ、収集者の名をつけて「松方コレクシオン」といった具合に多くは美術品であるが、あんな金持がと思う人でも随分ケチ臭い、金のかからないものばかり蒐めているものもある。往つた先き先きで石ころを拾って米たり、汽車弁の包紙や箸袋を蒐めたり、マッチのレッテルや古切手を蒐めたりする蒐集家もいるのでこんな句が生れたのだ。筆者の知人で、大掃除があると、熨冠りをして街中を這い廻り、廃品の中からもいろいろなものを蒐集する男がいたがこれなども買えば買える程度の随分ケチ臭い蒐集だった。こんなことを言ふと買わずに蒐めるその苦心がマニアの命だと叱られるかも知れない。



結婚式場 長生殿

近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場 貸衣裳も
豊富にそろえております ●6階



大阪日本橋
松坂屋
TEL 631-1171



川柳塔

参院選

一位二位みんな女にしてやられ

創価学会

狂信のふかさへ世間も恐れ入り

大阪府 西 いわを

浪曲の筋書通り出世する

古稀はよし皆はらからが集い寄り

大阪府 北川 春 葉

下足番して老夫婦生きる道

博士論文裸で書いたとは言わず

へエーこれが胃袋ですカレントゲン

われは海の子とび込んだが死ぬぞ

ソイマル 羽佐間 柳 葉

碌でなし飲むことだけは卒業した

修繕のきかぬ身となり蓄めたがり

堺市 吉田 圭 井 堂

統計がと言われてみればたてつけず

妥協した日だけ専従そりかえり

じたばたの妻が金魚を飼い始め

あれだけのマントがどこへいったやら

官道もおちたか辞めるとは言わず

防府市 長 野 井 娃

二男三男長男までが村を捨て

刑務所へ籍おいたよに舞い戻り

岡山県 直原 七 面 山

終盤戦へ候補者涙声になり

おばあちゃんの手廻し墓を建てて待ち

私の日とてありませなんだと妻の愚痴

停年退職系の切れた風のように

高血圧とは見えぬ立派な飲みっぷり

惚れている証拠は財布のまま渡し

鳥取市 河 村 日 満

一票に次郎長がある恥しさ

馬鹿とある票四五人に見せ歩き

あなた好きななんてのもある投票紙

わざわざの一票へ該当者ありません

倉敷市 木 村 千 容

孫が来てプールのがないと不機嫌な

道ならぬ恋とけなすは第三者

大阪府 木 村 水 洞

夏やせの季節へ献立気をつかい

大阪市 真 鍋 一 瓢

西宮市 若本 多久志

ほんまにするぜと脈ひいてみる

モーニング脱いでやれやれわが家なり

ステッキが明治生まれによく似合い

就任の決意は少し嘘も混ぜ

大阪市 正 本 水 客

地下街をはみ出してきた人の群れ

人妻の言葉になって別れ言う

成り上りに見られたくなし木を植える

高槻市 丸 尾 潮 花

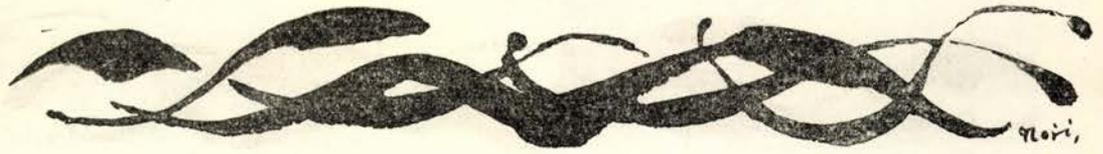
七月の風へボートがおろされる

宇治へ来て土産にもろて去ぬ蜚

兵庫県 小 西 無 鬼

うじに似て高い所に住みたがり

うじに似て高い所に住みたがり



全速を出してみみずが死ぬる道

発熱三十九度五分

辞世でも詠もうと思や熱が引き

大阪市 後藤 梅志

求め求めて真実より外はなし

落選をして逃げまわる人もあり

米子市 小西 雄々

踊りより無芸大食膳に座し

全快へ下駄の感触なつかしみ

セックスのかたまりという化粧する

大阪市 山川 阿茶

M過剰気ままも過剰ミスでいる

古稀近く今更ドライにもなれず

惚れられて惚れられて二号死に

大阪市 金井 文秋

ワンマンでなけりや会長つとまらず

ツイストは失恋をしてそれつきり

葉光氏を悼む

背負われもせず天国へひとり行き

加賀市 那谷 光郎

男手の雑巾つくねたまま乾き

老夫婦たまに喰べたいにぎりずし

マチスピカソどこがよいのと老夫婦

下関市 桜川 不水

骨肉は酒れても詩魂濤々と

岡山市 浜田 久米雄

べんちゃらを言い組合にかみつかれ

組合と話せば金のことばかり

当局の方は半分しか言わず

組合の言い分筋が通りすぎ

交渉のはじめ冗談から話し

出雲市 尼 緑之助

すぐ箸を出して酒仙にまだ遠し

サラリーマンの顔いつからか農を捨て

鳥取市 杉谷 湖山

滝つぼの底がきれいに死を誘い

番犬の番させられて居る男

奈良県 飯降 白香

ガード下ここにも街あり人が住み

危機はらむ対談オルゴールが鳴り

岡山市 福島 鉄児

殺人のあった堤に とぶ螢

快よいびき迷惑など知らず

鷺羽山にて

瀬戸の海見下ろす裾を手で押え

岡山市 服部 十九平

甲子園握り拳で主将泣き

BGの話題週刊誌で仕入れ

ばら寿司がグリーンピースの色で生き

高槻市 山田 季賛

清き一票広島へ帰る一人旅

特急に蠅が乗っていた乗っていた

岡山市 田村 藤波

ワンマンの孫には甘い好々爺

非農家も心忙しい農繁期

岡山市 本田 恵二朗

アマリスの宿命そっぽ向きおうて

竜舌蘭大手ひろげて威張るなり

朝顔の自由を許せばからみあい

京都市 松川 杜的

三十年振りの改築

食卓セットへぎこちのう母も来る

すれ違う一等車の顔が瘦せており



大原女の梯子器用に露路曲る

鳥取市 森本法泉子

入院の担架は下駄のまま通り

いささかの恩を忘れぬ人にあい

堺市 高崎雄声

停年過ぎてからズボンの筋をたて

島根県 藤井明朗

塵埃車西瓜へ愚痴を置いて行き

常連へ仲居 奥さん気取っとり

倉敷市 野田素身郎

夕焼けへ原爆ドーム赤く燃え

悲恋映画からの帰りは雨となり

大阪市 清水望峰

タオル一本貰う役得うらやまれ

別々に寝冷えしている倦怠期

大阪市 不二田一三夫

山本葉光氏逝く二句

五十二年童貞さびしくページ閉じ

豆秋さん迎えに来てはる王子町

愛欲にエンジンかかるおそろしさ

抱き合って互いに鼓動聞いていた

兵庫県 酒井ひか平

学校で貰ろうた種の蒔き場なく

若屋市 丸川初甫

供花一对御恩になった印にし

田卓の人気をさらう一人っ子

年聞いて年には不足のないお通夜

大阪府 早川清生

柔術の嬌流 骨を接いで食い

割り込んで席奪い合う児に育て

しまい風呂商敵の妻どうし遇う

投票所

学会へ入れさす中風かつぎ込み

大阪市 西田柳宏子

会社新築移転二句

残業へウドン屋近い嗅いする

通勤へ自家用車くまが欲しいいつゆの雨

倒産へええ時のこと言わず責め

参院選終る

縁の無さそうなの許り当選し

堺市 辻圭水

子があるに初恋の人夢に見て

大阪市 児島与呂志

車掌台デッキカイ乳房も寄って来る

風鈴の風に身重がいたわられ

ファンと身重の一日聞いてやり

急停車黄色い帽子転げて来

西宮市 小浜牧人

雑用に追われ老眼の度はすすみ

風涼し医師に入浴許されて

Y談へ満天の星降ることし

泣いて頼んで認証式は澄しこみ

名古屋市 菱田満秋

もてせぬのにサーピス料を払わされ

岡山市 池上知恵美

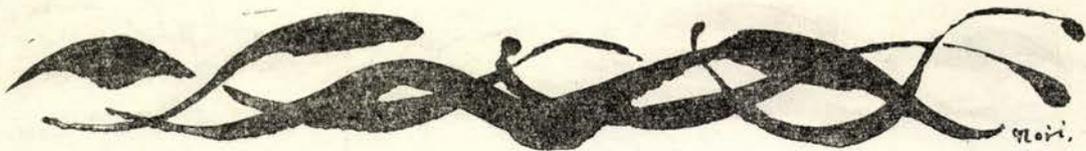
注意報へくもはせつせと糸を張り

街路樹の下にきた音に変わる傘の雨

死んで浮く鯉に無情の雨が降り

水田になって風鈴の音も変り

大阪市 橘高薫風子



特急は飄爽鳶の輪を残し

十和田湖 二句

七月の奢を極む水の精

踵かえさん魂青に溶けぬうち

酸ヶ湯温泉

混浴のさながら古き風俗画

工藤甲吉氏へ

半白のオールバックに知情意が

山根白星氏へ

東銀座うれしい恋もありそうな

川上三太郎先生へ

初対面一掬という言葉あり

下関市 中村九呂平

或日ふと以前の家の方に去に

七月十三日早朝米三翁の訃報を受けて

米三べいさんの訃に箸を持ったまま啞然

奈良市 宮口笛生

膝枕女は馴れた嘘を言う

日光観光

見落してしまいそうなるねむり猫

大阪市 西川 晃

空気までゼニの臭いのするところ

大の字に寝る妻にして食に耐え

食足って厭世感にとりつかれ

岡山市 林 葵丘

つかけて来た支関がきれいすぎ

おそろしき詩になる雨が家を呑み

神戸市 仲 どんたく

冷蔵庫あければ魚の眼と出合い

夫婦松枯れて夫へ尚添いて

大阪市 本多柳志

アルバイトイデオロギーは別に持ち

ホームバー悪を企むとこでなし

西宮市 樋口舟遊

豊中すゝむ氏の旧居を訪う

屋敷町のほんほんだったにちがいなし

望郷の一つ青いトマトが生っている

新潟県 高野むじな

リバイバル歌うに父は酒がいり

大阪市 石倉旅風

ツイストはいただけませんのも歳か

道徳の焼れ乞食が無くなった

金持ちになって人間小さくなり

大阪市 魚住満潮

続西成界わい

四畳半一間へ義理の母が来る

ボン引へ大粒の雨降ってくる

針金のような腕へ麻葉はりを刺し

いらっしやいませと万引迎えられ

小商あきない西成の露路隅々を

愛媛県 村上旭童

実家へいくのにお天気がどうあると

眼鏡の底で弱氣の目が動き

濁流の中を目高も生きのびた

神戸市 傍島静馬

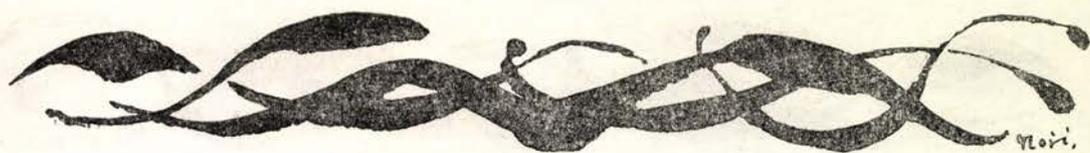
手摺から虹つかめそな山の宿

借金もうあらへんやろと飲みに来る

姫路市 植村客遊子

酒飲んだ時の元気でやれという

モーニング着てもパチンコ屋へ這いる



寝酒飲むとこまで親に似てきたし

父ちゃんが切ればよけいに下手に切れ

大阪市 河井庸佑

移り気なファン心理がこわくなり

もてもせぬのに死に金すてて行く

大阪府 谷沢好祐

一浪は常識だよとぬけぬけと

ベストセラー医学博士のこんな本

泉大津市 高津徹也

初陣をまず打ちとったへぼ将棋

祖母逝きて二年真赤な柿実る

還暦へ裕一枚着てすわり

愛媛県 榎紫光

記念品値踏みしてから仕舞い込み

目薬をさしてマジヤン徹夜する

青森市 工藤甲吉

へヤピンを情事の跡に見つけられ

立て膝を女が故に叱られる

迷い子を抱いてポリスはパパとなる

糸切歯女らしさをのぞかせる

松江市 小林孤呂二

絢爛たる踊りにみとれ見合いですみ

リクレーションは眠られず波の音

豊中市 林夢虹

めし食い終ってうらみ心が消えていた

金婚式声まで夫婦似てきたり

処女だらうか胸もあらわな女たち

座席を譲らなかつたことを五分程悔ゆる

西宮市 山本一傘

誰でもがしてる程度のがばれ

大阪市 今西生薑

惚れてるとやすう見られて腹を立て

らんちゅうのように着飾り衣食足り

京都府 室井八九寸

チップ一切御無用なこの高さ

主婦業ももうベテランというめがね

次々へ新語手形の出る不況

岡山県 横山一声

再婚はせぬ気お茶や花へこり

きょうはくをしてまで信者かき集め

小松市 関戸宗太郎

職工がいやで労組で事務をとり

学歴を超える知識があだとなり

美禰市 安平次弘道

大ジョッキ干す閨女の顔でなし

大河ゆうゆう歴史を超越して流る

馬の骨がなどと成金への嫉妬

我が家の合理化へそくりへしわがより

宇部市 平田実男

鉄骨が空から降って来るも首都

家計簿をたかが二人の子が乱し

霊柩車の運ちゃん笑みを忘れかけ

香川県 石井かな

労働を嫌う日本に誰がした

三人目女で夫が返事せず

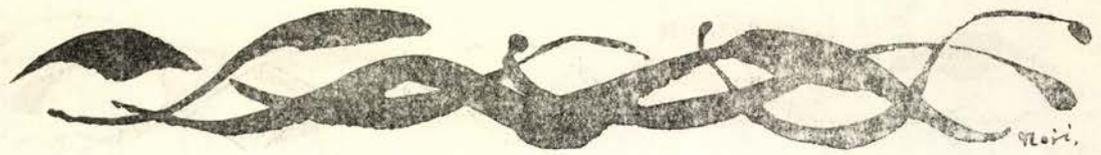
到頭あいつ代議士になりおった

大和郡山市 中内学彦

仕込み鹿おじぎが出来て放り出し

半年もしらされ女蛇のよう

諫早市 川岡靈眼子



九州水害

御大家の主人トップで流れて来

排出作業 自衛隊士が神に見え

貝塚市 杉本一鶴

後へ引く事も一つの勇氣にて

亡父七回忌法事へ

六年ぶりの我が家の畳寝付かせず

大阪市 本多清人

いささかの抵抗一票にある自由

審議する上司も埃の出る体

なんやかや言うても自由党の国

当選の日から「みなさん」もう忘れ

富田林市 浅川八郎

素足の女ネクタイを買いに来る

お人よし仕事となれば臍まけて

PTAデブの母ちゃん行かんとき

傘の内こんなな女は変るもの

岸和田市 内藤きさ子

あまりに褒めすぎたで恋と誤解され

空想のいと面白し夕涼み

電化の隅に処刑まつてる火吹竹

同
舟
近
詠

大阪市 橋本緑雨

ピヤガーデン夜景も星も目にいらす

天香粉の娘に金魚はすくわれる

提灯で迎えとは旅の面白さ

バスで天の橋立

普天さんと声かけられぬ川向い

長野県 高峰柳児

不渡りのことで自家用乗り廻し

おみくじの凶星へ姐さんひそと読み

ネットレス食しい胸に映えていす

袖カバー汚職に縁ない椅子にいる

今治市 長野文庫

無茶苦茶にスリの下ッ端押しまくり

嘘まことませて一票こいねがい

さざえ貝生まれた磯で世を終り

夕焼けへ明日の段取り組み替える

先輩の指導で酒の味も知り

重宝なおっちょこちよいの使いみち

和歌山市 秋月宏方

投票箱清濁合わせ飲むかたち

観光船軍靴を乗せた日を思い

淡路洲本にて

扇風機休みなさいと海の風

貸馬 二句

よい娘乗せても馬の無表情

貸馬はまた撮るのかと思えども

松山市 月原宵明

陸軍と言うものありし父の歌

落選を知ると同時に逮捕状

高校のセーラー脱げばもう おんな

大物の葬儀老妓も数珠を持ち

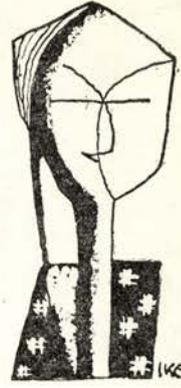
靴下の片方敷帳の中から出

名古屋市 長谷川鮮山

甘く見ているなむらむら湧く闘志

胸にきた言葉コッソと置くコップ

秋風上月城跡



東野大八

近ごろヤケに身近かな人たちが死んだり、ケガをしたりする。だんだん身近かな人からこちらに近づいてきそうな予感もあって、あまり気持ちのいいものではない。ことにさる六月二十九日付の新聞はぼくににとっては一大ショックだった。

「城主の十四代目が親子心中」という見出しであったが、その主人公の人物たるや、ぼくをはじめ多くの家族にとっては、切っても切れない因縁まことに浅からぬ間柄であったのだ。

新聞記事によるとつぎのように載っている。

「兵庫県佐用署へ、愛媛県警本部から愛媛県大洲市中村質商上

秋仁さん(五四)と妻ミサカさん

(四四)長男哲男くん(一四) 〃

大洲市北中三年〃がそちらの上月城跡で心中しているかもしれないから調べてほしい。との連絡があり、同署では早速、上月城跡を調べたところ、くだんの三人の死体を発見した」

ぼくは早速地元元のローカル紙をひっぱり出し、この記事の詳細を捜した。案の定、ある新聞の社会面にトップ記事で扱っていた。

「夏草のみ茂るも哀れ」上月城跡」というのが、城跡の夏木立もこんもりとした遠景写真にかぶせて出ている。

「署員たちが汗をふきふき、生い茂るササをかきわけていくと、

山頂より少し下ったところに中年

の女性と少年が服毒、約七十メー

トル離れた松の木に初老の男が首をくくっていた。死後数日を経過しており、愛媛県警の知らせの三人で、ミサカさんは木の葉を敷きつめた死の床の上でしっかり哲男君を抱きしめて倒れ、その上に秋仁さんのレインコートがかけられていたところから、秋仁さんは妻子の死を見届けてから首をつったと思われる。母子のかたわらにはオモチャのピストルに、カメラ、現金千円が散らばり、また二つのポストンバッグには、身の廻り品と現金一万円、遺書五通があった。

上月町長あてには「死体は火葬にしてほしい。カネは埋葬費に

あててほしい、ご迷惑をかけてすまない」とあった。また山頂近くの上月城主であった赤松藏人の墓石の上に系図を焼いたひとがたまりの灰が黒々と残っていた。

地元紙だけに詳細をきわめている。「おうような人柄」と別見出しで、記事はまだつづいている。

「大洲署の調べでは、上月さんは善人で通っているためか、家業の質屋営業も資金くりがうまくいかず、それが親子心中の大きな原因となったらしい。上月さんが自殺のおそれがある、とわかったのは、知人の某さんが、六月二十日戸をあけて入ってみると、二十三日付佐用局消印の手紙が土間に落ちていたが、それが亡き母あてなので「これはおかしい」と親類筋にかけ込み開封してみると、合掌哲男六月二十二日午後三時五十分死亡、妻ミサカ同四時十五分死亡、わたたくしは五時にナワをかける、場所は上月城跡、お許し下さい」とあった」

記事の大意は以上の通りであったが、ぼくはこれを一読して気がつく、顔中が涙でぐっしょりであ

あった。家内もあとでこの新聞を読み涙を流してただ暗然となるばかりだった。

上月さんには、ぼくの一家はそれは大変なお世話になった。いつもニコニコした太っちょの上月さんの顔。その横にいつもキチンとかしこまっていられたお姫さまのような小さい奥さん。上月さんのお母さんは産婆さんで、地域助産婦会の会長さんをつとめていられた、しっかり者でいつもりんと気性の勝った顔で上月さんを叱りたしなめ、ぼくをすら一喝されたこともあった。そのとき



「あのおばあちゃん、淀君みたいと家内について苦笑したほくであるが、うちのこども三人のうち、真ん中の子はこの淀君殿にとりあげてもらった。ほくが貧乏のさかりで、お産のお礼がどの程度にするか、ほくは率直に上月さんに相談した。

「いや、いいですよ、わしのおふくらだから、うまく安上りに片づけましょう」といつてくれた上月さんで、出産の祝いを逆にこちらがたんと戴いたものだった。

「わたしは民生委員ですからね。世話するのは当り前のことですよ」と終戦直後引あげてきたすかんびんのほくを、徹底的に面倒をみてくれたのもこの上月さんだった。家がなくて、五日も六日もほくのために家探しをしてもらった上、お金まで無利子で快よく貸してくれたものだ。

上月さんは、水郷川柳社の御大今川柳影さんと仲良しで、大洲で最後のほくの住居となった京風の隠居部屋の家主も、高月溪月と

いう水郷川柳社の同人だった。この家も上月さんのお骨折りで入れたのである。

のんべ柳人の柳影さんは歯医者さんで、よく配給の酒精アルコールを技工室で平らげたものだが、上月さんは酒は少しもやらないのでわれわれの横で終始ニコニコしては、面白い半畳を入れてごきげんだった。

「世が世であればこの人はフスマの風もいとう身のお殿様でね」と柳影さんがいうと、上月さんは顔を真赤にしてデレて、勿体なくもなげなしの酒をつぎこぼしたりした。まさか、上月城主十四代のお館さまとはこちらも気がつかないの、酔っぱらったこちらには「ウヘッ」とばかり平伏したまねをして火鉢に足をつっこんで一騒ぎ、そのほくの足を熱心に灰ふきはらってくれたのも上月さんだった。

思い出せばきりのないほどいろんなことがあった。戦後の塩からい故郷の風の中で、血をわけたばかりの親せきより、一番親身になって心配して下さったのが上月さんだった。

引揚げの眼に花だけが美しくい

というほくの句を耳にするなり感動の握手をして「わたしも引揚者の一人、まさにその通りです」といつて、川柳を作れないのが情ない、といいつてしんから口惜しがったのもこの人だけだった。

ほくの家内は女同士、ミサカさん心から同情して「哲ちゃんの子生まれたときのあの奥さんの喜びようを思うと……」といいつて死亡記事の新聞に涙を落した。

「三指ついて玄関のごあいさつ、このきわちとした床しさを思うと、血は争われないものねえ」とこの家内の感慨に、赤ん坊をこわごわ抱いてごきげんの上月さんの姿をいまもほくはハッキリと思いうかべる。好人物で仏様のようなこの一家の悲劇の終末、ほくはただ思い出すたびにただ暗然となり、片手だけのにぎりこぶしを力いっばい開いたり閉じたりする。いまとなつてはただこうするしか仕方のないほくなんですよ、上月さんよ、奥さま。

續
川柳書架

現代川柳名句集

(高木角恋坊編)

★本句集は明治、大正、昭和の初め頃の句を五十音順に編纂したものである。

★昭和四年十一月十日発行。四六版横綴、四八三頁。定価一円五十銭。発行所、東京市日本橋区鉄砲町六番地磯部甲陽堂。

★編者は明治、大正、昭和の初頭に於ける柳界の重鎮。

川柳句集

いづみ

後藤蝶五郎著

★本句集は昭和十一年に「壺」を出版してから以後の十年間の作品から五百句が収録されてある。

★目次一維まつり、はねつるべ

砧の母、雪つぶ

て★昭和廿二年九月十日発行、菊半蔵、一〇四

(23)

頁。定価三十円。発行所、青森県黒石町市ノ町五〇番地、後藤方、いづみ出版後援会。★著者は東北川柳作家の重鎮だった。

山陽川柳

(麻生路郎選評)

★本書の巻頭には選評者の写真と序が掲げられてある。

★目次一雑詠、雪、雑詠、人形、花見、アベック、浴衣、涼み、ハシカチ、税金、祭、火鉢、正月雑詠、電話、選挙、自転車、靴、傘

★昭和二十八年十月十五日発行。B6版、二三七頁。定価二〇〇円発行所岡山市東中山下四〇山陽図書出版株式会社。

★本書は山陽新聞夕刊が復刊されたのを機に山陽柳壇が誕生、選者麻生路郎の選評を集録したものだ。

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ近鉄特急

ステキな特急
2階電車

大阪一名古屋
ノンストップ
2時間18分

大阪上本町から	名古屋ゆき	20往復
	伊勢ゆき	9往復
名古屋から	大阪ゆき	20往復
	伊勢ゆき	10往復
伊勢から	大阪ゆき	9往復
	名古屋ゆき	10往復

オール座席指定・特急券は14日前から発売
近畿日本・近畿日本・近畿日本・近畿日本
近畿日本・近畿日本・近畿日本・近畿日本



(写真は無名)

北方の感激

―師を青森に迎えて

工藤 甲吉

師はついに来た。この日(七月二十日)夜の十一時五十分、本州最北端の青森駅に裏回りの急行「白鳥」がすべり込んで、巨匠麻生路郎師と随行者の橋高薫風子氏、村ノ女さんの三人が長い長いホームに降り立った。大阪へ青森間一千五十二・九キロ、十五時間四十五分をかけての長旅だからまさに「遙くも来たものかな」である。先ず師と感激の握手をし、それぞれ簡単なあいさつのもと、駅から折柄の雨をついてタクシーを浅虫温泉の東奥日報社寮に飛ばした。ここで改めて名刺の交換などをしたが、師をはじめいづれも初対面にかかわらず、どうしても初対面のような気がしないのはどうしたことか。私たちは一夜にして十年の知己になってしまったのである。まことに川柳人はよきかなである。

く七月号に発表した句による報告書といったものをとり上げ「近ごろ面白い試みであると思った」しかし、その五十七句は、詩情に乏しいのが、はなはだ遺憾である。せつかくの好題材をとらえていないが、心理的に深く掘り下げないで、笠付式表現で楽々と詠んでいられるのはホントに惜しいと思ふ」といわれ、山奥の部落の情景をほうふつさせるという。

文盲部落蒼々と昏れランブ
点く

文盲部落七つの草家花が咲き
の二句を掲げ、あえて見も知らぬ私にたいし、敬意を表してくださった路郎師を、こんにちをはるばる青森に迎えて親しく語り合うとは予想だにしていなかったのである。事実私は、私の新聞社(東奥日報社)が、師を第十六回青森県川柳大会に特別選者として招待するにあたっては、幾度かちゅうちよした。それは招待とはいふもの

昭和十六年、川柳雑誌八月特集号の巻頭に『文盲部落を訪う』を讀む」と題して、私が『みちの

のこれといった待遇をしてやれないことや、師の健康などを考えてのことであるが、しかし、いつかの私宛ての来信の中に「東奥日報社は小林不浪氏が社会部長をしていただけで全く縁がないことではない」とあったことに勇気を

得、思い切って手紙を出したのが幸いしたわけで、要は師が「人生意気に感じてくれた」からにはかならないのである。したがってこの間の事情を知る泉下の柳人が、師の犠牲的精神に感激したのはいうまでもないことである。

かねがね雑誌など写真では押していたその温顔、(ある時代は徳川夢声に似、ある時代は横山エンタツにも似たとか……)薄らいた頭髪、白にいくらか金色も加わる美しい髪、眼鏡の奥にひそんだやさしい瞳、きりりと引き締まる唇元、そして全身から発するひらめき。『生きている川柳詩像』とも

も言おうか。私は思わずたじろぎ『三尺下がって師の影を踏まず』という古人のこゝばを思い出して

いた。
×
二十一日は休養、浅虫から新聞社にやってこられたので、昭和五年函館市で開かれた第二回海峽親善川柳大会のさい、通過の思い出があるという青森港などを案内、岸壁で「私は尾道生まれなので船が好きだ。船はいい。船はいつまで見てもあきがい」という師とならび、青川連絡船をバックに薫風子さんにシャッターを切ってもらい、夜は宿を訪問、歓談、きぬものがあつた。
二十二日はいよいよ大会。会場は青森市民会館の大広間。師の声咳に接すべく県下一円から集まつた柳人はおよそ九十人。かつてなかつた盛況ぶりに主催者側も師も大満悦の態。席上師は『川柳一筋に』と題し。あらまし次のような講演をし、勢いの赴くところいづしから予定の時間を越すありさまに聞き入る一同はひとしお感銘を深くした。私は明治、大正、昭和の三代にわたる歴史を歩いてきた明治三十七年から今日まで初めは新聞などに発表し、それから同人雑誌を作つた。当時、私たちの目標は柳多留など宝暦、明和のころの古川柳をしのぐことであつた。しかし、それだけでいいのかわりかえを持ちはじめ、川柳を改革しようとした。新しい川柳を心がけ力を尽くすことになつた。それがいま私の歩んでいる道である。川柳界は他の俳句、短歌に比べると勉強が足りない。しかも明

治以前からの墮落で改革も立ち遅れた。お互いにくさしたり、ほめ合つたりしているだけで社会と没交渉ではないのではダメだ。まず一句作らうではないか。川柳の社会化運動をしよう。そのためにより作品を作るように心がけよう。川柳を社会の中へ押し進め、手をとりに口をあけて食べさせるのであ

×
なき世界は発達せず」と職業川柳人としての宣言をしたらそんなバカなことがあるかといわれた。
○……選者が自分の好きな句だけをとるのはよくない。個性のある句なら少々キズがあつてもとつてやる。その人でなければ作れない

すばらしい
心地
着
蝶
矢
シャツ

句があるものだ。それを伸ばしてやるのである。私は句を選ぶより人を選ぶ。そうすることによってかつて私の門下で川柳界の一茶といわれた須崎豆秋君のような作家が出てくる。

○……近ごろの川柳家の川柳は「笑い」から遠ざかっている。これはよくない。しかしこれも時代といえよう。なぜならばほんとに心から笑えない時代だからだ。なんでもスピード化してしまっている。あんなオートバイのようなものに乗っては、周囲が見えないはあたりまえじゃないか。笑いたくても笑う余地がない。

○……ガガリンは「地球は背かった」といったが、あれは私にも一つの感激となった。もし二番目のだれかが行って「地球は赤かった」というかも知れないし、三番目の人は「黄色かった」というかも知れない。このように川柳家は人の感じないものを感じてつかまえないければいけない。

○……川柳一筋といったが、一筋にもいろいろある。太い、短い、細い、長い、価値のあるもの、ないもの、まっすぐなもの、曲がっているもの等々。それをいかにやっていくか自己の生活、人間をやることに考えをおよぼしたら川柳も本物になる。

○……川柳は人間をトクヤする手段だ。句の上に自分の悪い点を出してみせる「君もそうか、おれもだ」と同じように人間同士が胸を打たれる。お互いに反省していい人間になるようにすべきだ。

○……人に通じない句なら作る必要はない。自分のアクを出しきると人の句になる。いい句を作って共鳴し合うということが大切だ。講演は時間の関係で残念ながら「川柳の作り方」に移る一歩前で打ち切れ、引き続き特別選の『雑詠』を披露、大会での責務を無事に果たし、閉会のと会館食堂で催された有志の「路郎師を囲む会」に薫風子、メ女の二人を随えて出席した。

西谷みさを・漆戸風々子・工藤安亭・船橋三郎・横山幸坊・中野順慶・田沢良太・松尾夢城・神手津王・佐藤狂六・杉野十佐一・木村涼人・杉野草兵・後藤



講演する路郎師 — 東奥日報社写真部撮影

いきつに立ち師の遠来の労をねぎらい、健康を祝して乾杯、引き続き柳談、漫談に花を咲かせて散会した。私はこのあと工藤安亭・木村涼人の両川柳雑詠々友とともに浅虫の宿に同行したが、師は「一本ぐらいいは……」というビールをいささかオーバーするほどの上機嫌で、話題は川柳ばかりでなく政治・経済・社会・文化はては哲学に至るまで尽きることなく、ともすれば時を忘れるありさまに健康を懸念するわれわれは、やつと機を見て退散する始末。ともかく私は師のような人物がわれわれ川柳界に存在することに、この夜多大の誇りを感じたものである。

二十三日。この朝

九時、浅虫の宿を出発した車は、師・薫風子・メ女と私の四人を乗せて一路国立公園十和田湖に向かった。天気男という師が青森に着いてからは、雨もどこへやら、この日も天気恵まれたのはなによりも幸いであった。途中「雪中行軍」で知られる後藤伍長の銅像を遙かに眺め、

柳悦・留目たか志・小泉紫峰のほか東奥日報社から白取取締役・米谷事業局長・工藤甲吉が出席 發起人を代表して西谷みさをが

流に出、明治の文豪大町桂月の名づけた阿修羅・三乱・白銀など数々の清流・急流・激流や、不老・姉妹・白絹その他の滝の美を鑑賞、子の口に着き、ここから観光船「北斗」に便乗、湖上の人となり一時間余りを遊覧した。幸い波もおだやかで、湖上から御前ヶ浜の故高村光太郎氏作「乙女の像」に敬意を表し、休屋に上陸、ここで昼食を済ませて小憩のあと、これも川柳雑詠々友漆戸風々子君の紹介で、同君の義兄にあたる栗焼の大家森田五成氏を十和田神社の近くに訪ねた。折り悪しく森田氏は不在だったが、奥さんが待っていてくれ、四人はすすめられるままに筆をとった。初め煙草をくゆらしながら黙り込んでいた師は、ようやく诗情が湧いたらしく一枚の皿を前にしておもむろに筆をとった。一瞬あたりに厳肅なものがみなざり、私は思わず息をのんだ。さていったい何を書くだろうか。見守る中に筆は動き、皿のまわりには幾尾かの湖の名物「虹の魚(鮎マス)」が描かれた。しかしやがてそれは消し去られ、次に筆勢するどく一気に書き上げられたのが

十和田湖よみなさげになれ 旅人へ

という句。私はこの句のスケールの雄大さにまず一驚した。そしてさかんなる意気とその情熱の激しさをジワジワと肌にしたのであるが、これこそは「いのちある句を削れ」を現実にしたたひとこまであったといえよう。かくて帰

路につき、途中諏訪台では、昨秋天皇がお立ちになられたという同じ場所に立たれて全湖を俯瞰、さらに蕨温泉付近の大町桂月の墓に詣でるなどして、十和田湖遊覧を終った。この日も師は終日上機嫌宿では最後に「川雑踊り」を歌うなどかくして全旅程を終り、浅虫駅午後十一時五十二分発急行「北斗」で、おだやかなあの大坂弁を耳朶に残して東京へと発って行ったのであった。

滞る丸三日。その数々の教訓や逸話など書くことあまりに多く、オイソレとは、とても整理がつきそうもないところから、極めて概括的なもので終わるが、ただわれらは、師の長年にわたる川柳活動の実際を聞かされ、まことに慚愧にたえないもののあることを痛切に感じたことだけは、特に付記して置きたいと思うものである。

(筆者は東奥日報社編集次郎)

東奥日報社主催第十六回青森県川柳大会は、七月二十二日青森市民会館大広間で川柳雑詠社主宰麻生路郎師を迎えて開催、投句者各地から百二十六人、参会者八十余人といふ盛会であった。なお入賞者には山崎青森県知事、川維から副賞が贈られた。

- ① 田沢良太
- ② 松尾夢城
- ③ 西谷みさを
- ④ 村上秋善
- ⑤ 森越銅児楼
- ⑥ 柏葉みのる
- ⑦ 宮本紗光
- ⑧ 齊藤しげる
- ⑨ 西山金悦
- ⑩ 工藤不老人

路郎師を囲む

東京の
一夕

アクメ会の一員

高須 啞 三 味

「に」と、路郎師に連絡した。路郎師からは間もなく御返事があり「久しぶりのことだから、是非東京には立ち寄りたい。しかし日数も余りないし、長旅の疲れも心もとないから、大袈裟な歓迎会のようなものはお断わりしたい」と言うこと

をきめただけで、何人集まってくれるのか、見当もつかず当日を待つ有様だった。だが、何所から聞き伝えてか、電話その他の連絡で、当日（七月二十六日夕六時から）会場（東京都港区芝田村町二ノ七キッチン・ブラザー軒）へ集まったのは、お客様（三人）のほか左の十二人であつた。

主 賓 側 麻生 路郎師

橘高薫風子氏

藤村 メ女氏

川上三太郎氏

村田 周魚氏

関口六佳史氏

伊藤 瑤天氏

酒井 駒人氏

阿部佐保蘭氏

奥津啓一朗氏

山根 白星氏

漫画家 種 咲二氏

主 賓 側 富士野 鞍馬

塚 越 迷 亭

高須 啞 三 味

大体十人ぐらいのつもりで、会場を予約しておいたボクは、十五人の来会者のため、テーブルをつないだり扇風器をふやしたり、料理場へ追加を言ったり、テンテコ舞いをしたり、お客側からビールの寄贈があつたのをしおに、仕事のため少し遅れる迷亭が駆けつけてから本式に会を進めることにして、取り敢えず鞍馬の挨拶で、路郎師の健康を祝して乾杯し、一時間遅参の迷亭が来た所で、あらためて参会者の自己紹介から、主賓路郎師の「一筋に生きる」（青森の講演の一部）を拝聴し、その情熱のな

お燃えつづけていることに敬服した。当夜、三太郎氏は慈恵医大で健康診断を受けた帰途を、遠来の路郎師に逢うべく枉駕されたもので、その付添いを買って出られた六佳史さんには、感謝の言葉もない。また周魚氏も、昨年手術された眼が、まだ夜間の一人歩きには不安とあつて、共にやや早目に退散されたので、残った者だけが、鞍馬の音頭で、路郎師の万歳を三唱したが、路郎師は「参議院議員に当選したような気持ちで、まことにうれしい」と、最後によるこびの言葉を述べられたのは、主賓者側としては、百万語の礼言葉を聞いたより満足であつた。

(57・7・28)

主 催 側 一 員 と し て

富 士 野 鞍 馬

青森市で毎年一回開催される川柳行事の東奥日報社川柳大会では、毎年川柳大家を招いて、中心選者とし、その人の川柳講演を聞いて、県下の川柳開発に資しているが今年は大衆も大衆、その方のベテランとして東西柳界に重きをなす麻生路郎師を招いたと聞いて、ボクは直ぐ「青森の帰途を、東京に寄られるよう

だつたので、とにかくボクらのアクメ会（啞三味・鞍馬・迷亭）で「路郎師を囲む夕」を持つことにして、特に路郎師が逢いたい人などを知らせてくれるよう、再三再四の連絡の上、東京柳人では川上三太郎、村田周魚両氏のほかは特に通知をしてくれぬようにとのお心づかいで、アクメ会としては、ただ当日の会場

川柳研究会
きやり吟社
ちまた川柳会
観光川柳会
白帆吟社
織沢川柳会
ふあうす社
川柳雑誌社

七月二十六日、東京は酷暑、丁度土用丑の日であつた

が、饅屋でなく、芝田村町のキッチン・ブラザーで、川維



路郎師を囲む東京での宴会（迷亭氏撮影）

麻生路郎氏歓迎の夕が催うさ
れた。

路郎氏は、二十二日の東奥
日報社主催の青森県川柳大会
に招聘されて出席の帰途、東
京へ廻られたのであったが、
そのお疲れもなく、元気な顔
を見せて頂いた。随行には橘
高薫風子と藤村メ女の二人、
共に歓迎して集まる者十二
人、周魚、三太郎の両巨頭を
交え、アクメ会の主催であつ
た。

自然、路郎氏を囲む会とい
うことになり、老いて益々盛
んである路郎氏の言葉をきい
たのである。いち早く職業川
柳人を主唱し、新聞条例によ
る川柳雑誌を発売して、今日
なおそれを大きく続行して、



五、六年振り

塚越迷亭

路郎さんに会ったのは、い
つだったけなあと指をくって
みたらもう五、六年経ってい
る。尼崎に南北さんの句碑が

常に新しい方向に川柳運動
を、将来も拡げてゆこうとす
る実力者の言葉は、同業の士
として、まことに心強く承つ
たのである。これからの川柳
運動に、大きな、よい示唆を
与えられた。

みんなが、路郎さんとは久
しぶりであった、暑さを忘れ
て歓談、柳界として有意義な
一夕であった。路郎さんは、
近く喜寿と金婚に達せられる
ので、その賀会を不朽洞で大
きく企画されるそうである。
その時はまた、めでたい御夫
妻の温顔を見ることであら
う。路郎さんの御健康、御多
幸を祈って、バンザイを斉唱
したのは、二十一時を過ぎて
いた。

ことまで思い出した。その
後、川柳雑誌の上で見る健筆
も、消息もぐんぐん健康を取
り戻されて、元気な路郎さん
の雄姿を險に描いて喜んでい
る私だった。

殊にこんどの青森行きがき
まったと聞いた時、いままだ
関西へは伸びなかった東奥日
報の大会への招へいの手が伸
びたことを喜ぶ一方、これに
応じた路郎さんの勇氣……だ
なんていうのは違うかも知れ
ないが……敬意と祝意を表し
たものだった。そして帰路を
東京で一席をと啞三味・鞍馬
君と話し合ったのがブラザー
軒の一夕だった。

路郎さんが青森で「川柳一
筋に……と一席ぶつ日の午後
二時ジャストに銀座の松屋で
落ち合った啞三味と私は不朽
洞会の生々庵氏夫妻を囲ん
で、二丁目のブラジルで冷房
の利いた席で冷たいコーヒー
のストローを弄びながら、路
郎さんの健康について、過
去、現在を語り合って、東京
で路郎さんを疲れさせないよ

うにすべく約したものだっ
た。

二十四日の午後三時四十五
分上野駅の十四番ホームへ下
りたつた路郎さんは、とても
元気だった。啞三味・白星・
咲二の出迎陣を押しつけて思
わず、路郎さんの手を握って
その元気を祝福したが、握
り返した掌は力強かった。私
のひそかに心配した前日の十
和田湖観光から夜行へ、もし
て朝の仙台で二時間を宮城野
の人達と会ったり、市内観光
という強行軍の疲れを全然感
じさせない元気さだった。そ
こから渋谷の報恩舎(宿舍)
まで送った啞三味……私は仕

事が追い
込みに入
っていた
ので失礼
した……
の話で
は、白星
君を相手
に宿舎で
ビールの
満を引い

ビールは
楽しいものです

人の心を
明るくします

和やかな
雰囲気をつくります

**ビールは
アサヒ**

たとあったのでいよいよ安心
した。路郎さんは健康であ
る。川柳職業人では最年長の
路郎さんが、この元気を持ち
続けることは、周魚・紋太・
三太郎・水府のみなさんも、
川柳のために頑張らなければ
ならない意慾を振いおこすに
違いない。そして、さらけ年
催されるであろう、路郎さん
の喜寿と金婚を祝う会には、
みんなでこそって顔を揃えて
もらいたいと願っている。そ
の意味では不朽洞会員諸氏
のお骨折りを期待するものであ
る。



栗焼揮毫の路郎主幹と王藤甲吉氏。

十和田湖畔にて 一葉風子撮影

道草

青森・仙台・東京の八日間

麻生路郎

十和田湖の一句

私は昭和三年の八月と、昭和五年の五月と二回北海道へ出かけております。二回とも裏日本から出かけたに二日か。その頃は青森まで行くの二日か。一回目は大阪から青森まで、一ト言も口を利きませんでした。愛児ロンドンを喪ってから一年有半が過ぎ去っておりましたが快々としてたのしみます。かてて加えて、作品に対する芸術的良心から神経衰弱気味でしたから日本海にひきこまれるようなさびしい旅でし

た。二回目は函館で開催される第二回海峽親善川柳大会へ招かれて行ったのです。その時、青森駅で迎え、青函連絡へ送ってくれたのが、今は亡き小林不浪人君でした。そんな訳で、前後二回青森の土を踏んでおりますが、ただ漫然とメインストリートを歩いたに過ぎませんので、今度の青森への旅は全く未知の土地へ来たのも同然でした。

だから近代都市の形体を具現している現在の青森市に対しては眼を見張るばかりでした。私の印象に残っている青森市は軒が深く、雪が積っても、街路がトンネルのようになっている、そこを通行していたのでした。今は街を歩いても郊外を自動車でも走っても、あまり林檎を見かけませんでしたが、その頃は、メインストリートでも、駅でも山のように積み上げられた林檎を見かけたものでした。最近の青森市の人口は十八万三千余人で、女が男より三千人も多いそうです。青森へ行ったら、津軽美人を覗いていらっしやいと、東奥日報社大阪支社の佐々木さんに言われていたが、周囲に悪友がないのと、用件が川柳大会なので、そうした機会には恵まれませんでした。それに近年酒仙を廃業しているのの方が寧ろよかったです。

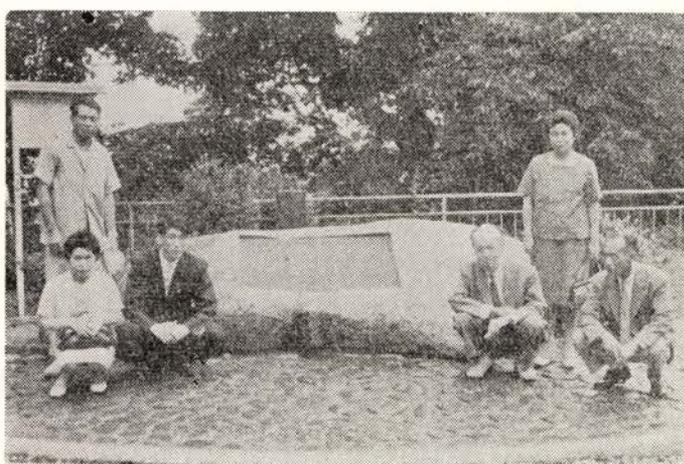
東奥日報社主催の川柳大会は七月二十二日午前九時半、青森市民会館で開催され盛会でした。九時半からの開会には驚きましたが、遠く弘前や八戸からの参会者の帰途の交通機関を考慮しての早朝開会だとのことでした。会場異風景としては、部屋の片側の端から端までズラリと点取表が貼り出され、五、六人がかりで扱けた句の採点をしていたことです。参院選挙が終って間のない時だけに、新聞社門前の選挙の当落発表を思い出し、それに似ている発表方法にはおえまじさを感じました。

私は講演一時間と雑詠の選をいたしました。優秀な句がありまし

に残っている青森市は軒が深く、雪が積っても、街路がトンネルのようになっている、そこを通行していたのでした。今は街を歩いても郊外を自動車でも走っても、あまり林檎を見かけませんでしたが、その頃は、メインストリートでも、駅でも山のように積み上げられた林檎を見かけたものでした。最近の青森市の人口は十八万三千余人で、女が男より三千人も多いそうです。青森へ行ったら、津軽美人を覗いていらっしやいと、東奥日報社大阪支社の佐々木さんに言われていたが、周囲に悪友がないのと、用件が川柳大会なので、そうした機会には恵まれませんでした。それに近年酒仙を廃業しているのの方が寧ろよかったです。

だが、簡単な批評にとどめおべんぢやらは一切言いませんでした。これは私の心づくしでしたが、判ってくれる人は少ないかも知れません。重ねて会う日を待ちましよう。

廿三日夜の十二時すぎ浅虫駅から一路西下いたしました。政宗の顔 仙台は二時間ばかりの下車を利用して「宮城野」の後藤閑人氏に会うつもりでしたが、川柳宮城野社の閑人、一字、濤子の諸氏に迎ええられメインストリートや青葉城趾を案内されました。仙台市の印象は樹木が多く、街が奇麗なものと静かなので、交通マヒと雑音になやまされ続けている大阪人にとっては極楽浄土でした。尤も、青葉城趾から見ると市街は美しい一枚の絵ガキに過ぎませんが、私の立っている前に突っ立って市街を瞰下ろされていられる伊達政宗公の銅像の顔には、ホレボレといったしほりたる政治家の顔でした。現代の政治家で政治家らしい顔の持主のいないことを淋しく思っている私にとって、政宗公との対面は何物にも変



土井晩翠の詩碑の前にて。 向つて右から一字・メ女・路郎。

一葉風子・濤子・富士共の諸氏 一閑人撮影

ました。 十和田湖よ みな酒になれ旅人へ

えがたいよろこびで、しばし銅像の前に突っ立っていました。政宗公の銅像から、すぐ前方右寄りに、土井晩翠の詩碑があります。これも美しいものの一つでした。

ここ仙台から出ている「宮城野」は温健な柳誌です。曾て「杜人」が出ていて、アタマの冴えを見せておりましたが、いつのほどにか姿を消したのは惜しいと思えます。その点、「宮城野」は夢助君の亡きあと次第に、影が薄くなるといって、ひそかに案じていたが、それは杞憂に過ぎないで、遺髪を継いだ閑人氏が夢助在世時代と何等遜色のない刊行振りには敬意を表さないうちにはいられません。しかし現在の殻から脱出して更にいい柳誌にされることはのぞましいことです。閑人氏等の底力を発揮される日待ちのぞんでいられるのは私だけではないでしょう。

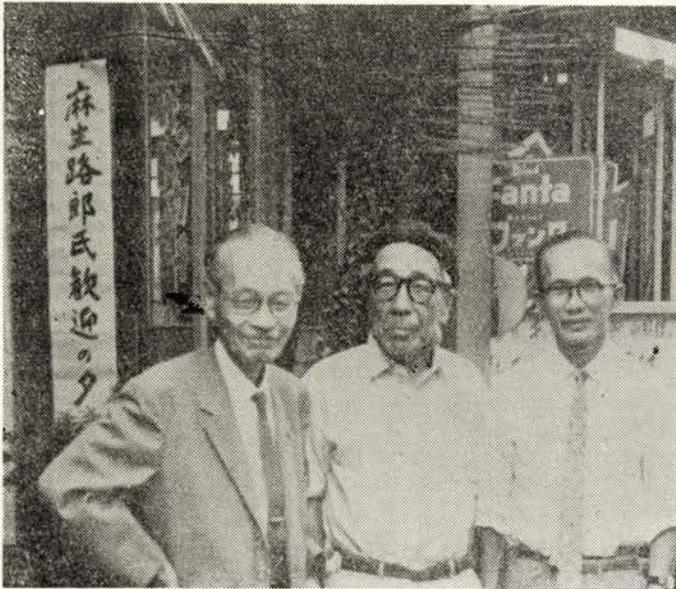
ブラザー軒の一夜

東京都の真門、上野駅へ廿四日十五時四十二分に着きました。迷亭、啞三味、白星、咲二、佐保蘭の諸氏に迎えられました。早速、渋谷の報恩舎に落ちつきここで三泊しました。

私にとっては久しぶりの東京入りでした。以前には五日も滞在して、一処で飲んでばかりいて、銀座を二丁程歩いただけで熱海で泊まり、サッサと引きあげたこともありました。三年余り東京生活をしながらありますが、東京は風土が悪いのと、多くの田舎者が集まって権勢を得ると威張り散ら

すので、私の性に合わないのです。よくよく用がない限りは腰を上げないことにしているのです。それでも時々腰を上げるのは知人や友人の顔を見たいからです。でなければ日本人の割の九百万人もが、押し合い、へし合いしているところへ、何んで出て来なければならぬのかと思うのです。こん度も上野から宿へ車を飛ばす途中で街の片側がプチこわされて砂埃りを上げていました。白星

平が昭和通りをつくった時に狂人視した東京人がいまだに絶えないのだなアと思いました。尤もこの東京人も田舎から出て来た東京人であることは言うまでもありません。私は東京に限りませんが、知人や友人の顔を見るのが楽しみなのです。いい顔になっていければうれしいのです。なかなかいい顔にはなれぬものです。金が出来たからといって、いい顔になれるには限



麻生路郎(川柳雑誌社) 川上三太郎(川柳研究社) 阿部佐保蘭(川柳職訳研究会)の諸氏

— 薫風子撮影 —

君の説明によると、オリンピックが迫っているので、道路を拡げらんぞうです。産人を捕えてから縄をなうようなことばかししているんだなアと思いました。後藤新

ってません。いい顔の持主になるためには先ず善意の人でなければならぬのです。インテリだからといって、聡明な顔にはなってもいい顔にはなりにくいもので

す。いい顔は聡明な顔でもあるが、ゴヤツとした顔でもあるのです。善意の人プラス聡明の人ではじめて、いい顔が具現するのだからと思われまます。

廿六日の十八時に、芝のキッチン・ブラザー軒で私の歓迎会が開かれました。鞍馬、迷亭、啞三味のやっていたアクメ会の主催です。啞三味氏から私の青森行の帰途は是非東京に寄るようになり、懇切な手紙が来たので、あまり多数の人の会合では困ると言っていました。ではそのつもりでやりましょうということでした。

定刻に出かけたら、ブラザー軒の入口で、三太郎氏とバツタリ会いました。そこへ佐保蘭氏がやって来ました。薫風子がバチリとカメラにおさめたのも瞬間の出来事でした。それから階上へあがりました。三太郎、周魚、鞍馬、啞三味、佐保蘭、啓一朗、瑤天、六佳史、駒人、咲二、白星の諸氏が卓を囲み、小生の側は私と薫風子と女の三人でした。少し遅れて迷亭氏がやって来て、歓迎のアイ

サツをされた。私は謝辞と同時に私の晩年の仕事の短詩文学文庫のことを披露し、協力方を頼みました。あとはビールのはじまっ、飲談に終った

★

ホップのきいた本場の味...

ザッポロ

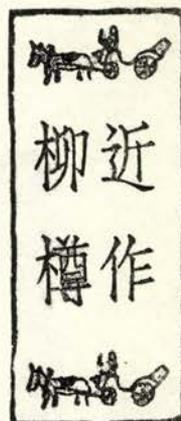
ビール

訳ですが、少く健康を害して、自分の社の句会にも出ないという周魚氏が顔を見せてくれたこと、今日入院する筈が部屋がなくてことわられたというからだと、三太郎氏が顔を出してくれたことは、感激そのものでした。お互いに明治、大正、昭和の柳界を歩いて来た柳友だからです。この日の三太郎の顔は実にいい顔をしていました。多くを言わず、僅かにジュースに口をつけている三太郎を見て私は涙が出ました。そしてなるべく三太郎の顔を見ないことにしました。友よ健在であれと祈って別れました。

私たち一行は大阪へ台風が来るらしいから迎えに出られぬかも判らぬという電報をもらって、二十七日の特急第二富士でその夜の十時に帰阪しました。

青森・仙台・東京の友友友と、懐みつつねむる

と、歌とも何んともつかぬものを口ずさみながら深い眠りに落ちました。友よ有難う。



麻生路郎選
北川春巢選

旗はふりつつ はねはらぬ 妻子と住 はらぬ 熊本 市 田口 麦彦
サラリーを忘れる西部劇が好き 同
緑十字お義理に掲げ工事中 同
わが道を行くとサラリー みな 飲み 同
葬式の花輪に敵とある序列 同
罹災地のヘリコプターが視察団 同
仁術は悲し片輪にして生かし 兵庫 遠山 可住
労組役員真面目な事務があはらし、 同
子の背丈母を見下ろし父を抜き 同
二十五人の孫の名前を間違わず 同
まだ這うてるのに大学まで案じ 同
凡人のうらやむ補償金で死に 鹿児島 市 吉田 俊和

腹の子にさしきわるほど笑いこけ 同
商才のある坊さんで経が下手 同
税務署をこわがる雑魚の域を出ず 同
税金の無駄使いせめ滞納す 同
コンバクト狼だます顔直し 羽島 市 福井与太郎
招待の客をかえして飲み直し 同
死刑囚検事と同じ国なまり 同
貧しさが金のかからぬ河で死に 同
米の値も知らずダイヤの値踏 み 同
横書きの水茎うるわしとはいかず 竹原 市 杉原 愛鳩
貯金出すように気易く借りにくる 同
社長以下窓へ寄つてるミコシ渡御 同
友東京へ
敢然と一千万の中へ行き 同
うらやまし美人コンテストの審査 石川 同村 虹要
小屋かと思う ちん が立っていた 同
声変わりお釣りをくれた事がなし 同
見合結婚でしたと仲のいい夫婦 同
鯨ダコと別にペンダコの余技が 津 市 島野ひろし



課題は打者

作者は投手

酒井ひか平

課題吟の句作は案外気にしておられぬ向きがある。色々と作句法を披露されていることだから、殊更我々若輩が書く程のこともなからうが。

最近、私は、課題が打者で、作者が投手だとの見方をしている。逆の場合も考えられるが、一つ投手になった気で、打席に立った強打者をいかにして、いかなる球で料理してやろうかと真っ先に考えて頂こう。

各投手には、投手独特の決め球があるものだが、決め球ばかり使って居ては息が切れるし、そこは直球・カーブ・シュート・内角・外角と多種多様な球をコントロールよく投げ分けて行く。どのコースでどの球で打者を止めてやろうかかと思うと興味津々たるものがある。

興味さえ湧いて来ると、自からファイトが出て来る。ファイトさえ出て来れば、何とか出来るもの



ミサイルにかかわりは <small>ない</small> 田圃這う	同	一任をされて結果を批判され	同
家計簿がこれ見よがしに投げて <small>る</small>	同	底辺に住んで画題を追いつづけ	同
ばあちゃん <small>を</small> じいちゃんになつ <small>つ</small>	同	思いきり羽根をのばして旅の恥 <small>竹原市</small>	協坂 笑顔
おそろしいことを知らない小雀の <small>鳥取県</small>	同	深窓に育ったような顔で嫁き	同
番犬と云うて女房を連れて出る	同	留守番を頼めば土産高くつき	同
子の影を中に砂丘の陽が沈む	同	小切手に書いた数字へ息を掛け <small>大阪府</small>	山田 蛙水
客来る黙っていたい時なのに	同	グレン隊おなじ米食う日本人	同
パラチオン怖れざるこそ恐ろしき <small>兵庫県</small>	同	朝顔の妻のまいたが先に咲く	同
貰うて去ぬつもりお供へはずん <small>ど</small>	同	愛すればこそとは勝手な別れ方 <small>愛媛県</small>	川又 庸児
時世哉娘のアグラほ <small>つ</small> とかれ	同	議員章ついた上着で暑くなし	同
六十年歩いた足や撫でてみる	同	衝突をしなかったのでどなり合い	同
レジャーの列に解放さ <small>れた</small> 奴隷を見 <small>大阪市</small>	同	廃品の力校舎を半分建て <small>見島市</small>	伊丹柳瓢子
ネオンの渦に祭提灯の抵抗	同	切り抜けるピンチへ家も子も忘れ	同
アロハ着たのが賽銭を派手に投げ	同	精霊舟道案内の月が冴え	同
は <small>だんま</small> が一個なんぼと聞いて止め	同	酒飲めぬ体に酒がしてしまい <small>玉野市</small>	小谷 仙山
元軍医に尻のデンプを切られたり <small>伊丹市</small>	同	仲人の口では僕もいい男	同
癌中風の遺伝濃厚蚊遣り焚く	同	ありがとうございます <small>と</small> 良く儲け	同
子よ孫よ日本の政治に <small>や</small> かかわ <small>ら</small> な	同	耕耘機 <small>の</small> うなりが米価せり上げる <small>宇都市</small>	神田 豊年
焼香へしきびの数をよんで待ち <small>枚方市</small>	同	人ごととなれば政治家気長なり	同

味の七-コ

モダン 川柳

心齊橋大丸北の辻東へ

御門

TEL(271)6684

御集会には階上御利用下さい



である。
自分が頭を使って作る句だから、どんな方法でも最良の作句法を持つてはよいのだが、こうした方法も一つの行き方であると参考程度に読んで頂ければ嬉しい。

梅志さん今日わ
たまにしか大会へ顔を出さぬ私だのに、私はその都度、梅志さんに会場の外の何処かでお目にかかる。

梅志さんは地味なお方であるから、とりたててお話しもされないが、
「ようお元気で」と言ってお下さるだけでこちらは通じる。
初めてお目にかかってから、どれ位になるか憶えて居ないが、妙



火事よりはましと空乗へあきらめる	同	市場籠子等のプランも入れられる	広島県	山田スミ子
腹巻も親分らしい巾を持ち	出雲市	中川 晃男	同	奥谷 弘朗
目くばせで子分の一人後をつけ	同	登山して人生観が変って来	香吉市	同
声出さぬ内がよかったニユーフェイス	同	浮気やめたらテンで意気地のな男	同	同
花一杯活けて俵せそうに病み	西宮市	末沢 花美	同	外山 瓢人
夏瘦せを恋してんのかしてんのか	同	計算機いと無雑作な音を立て	岸和田市	同
恋の形見サボ天に花が咲き	同	生き残る手段骨肉までも売り	同	同
得票も選挙違反もずば抜ける	兵庫県	公選のお手伝いです下足番	大阪市	宮尾あいき
事業不振二号に金を借りにけり	同	今時にこんな嫁御と目がうるみ	同	同
捨丸も老いたな父も 齢にふれ	同	恋人にテストされてるような恋	宮崎市	野口卯之助
パトロンは一人でないらし招き猫	京都市	信心の道とはこうも金が要り	同	同
旗立ててお子様ランチ派手に来る	同	ピフテキの厚さに家計におわせて	神戸市	波多野 幸恵
社運どうあろうとゴルフ腕が伸び	同	千代紙の着物きっちり左前	同	同
貧乏に馴れた 同士の車井戸	平田市	鈍感な人ねと妓 ヒント云う	岡山県	藤原 秋月
農地には未練ござらぬ儲け口	同	招かざる客罐詰であしらわれ	同	同
心境を問えば小川の水を指し	同	抜け道を知らず釜ヶ崎に住み	豊中市	稲増 久雄
信用のないのがまかしときまかし	岡山県	正直に生きる努力が屑拾い	同	同
ルージニ引くママが抱っこと呉	同	海の風女はパーマを忘れてい	京都市	都倉 求女
恋人の見舞はだまって花を差し	同	頬伝う汗を單車は乾かす気	同	同
	同	三輪で朝を出て行く公益社	西宮市	白石 良圭

本

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話(271)三三四四番

に梅志さんと、ちよつとの間何か言つて会場の前で別れるのが不思議である。

「梅志さんこんにちワ」

私が大会へ顔を出させて頂く、今一つの楽しみは今度は何処でそれが言えるだろうかという夢である。

顔を出すのは句会だけにはなく、こうした人に言えない人間的な横のつながりにも川柳人らしい心のあたたかさを楽しんで見たい。

踊りと川柳

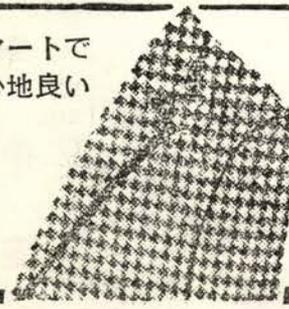
今西生 薑

踊りに門外漢の私だから、考え方が間違っているかも知れないが、踊りというものは原始的な神



幪き逃げは無免許飲酒未成年	同	呼びつけにしてと彼女の甘えよう	隠岐	不酔
惜しげなく花剪ってやる自尊心	青森県 木村 涼人	運のつきパーのマッチで巢を知れ	同	同
株下落又ぞろ飯に麦を混ぜ	同	五対五のキャンプを母が心配し	高知市 須藤 俊江	同
借る当てがついたゆとりへ月が見え	竹原市 大洲大八洲	フルに遊ぶ息子最後の夏休み	同	同
脱線をする気の財布たしかめる	同	ひき逃げが無免許と云う恐しさ	七尾市 松高 秀峰	同
おかまいも出るなり灯を消され	竹原市 山内 静水	冗談も云えぬ男で浮気をし	同	同
もう一人の巡査が無灯火承知せず	同	航海の難所名代の観光地	松山市 河本南牛史	同
ムームーでくらせる長屋けなる	大阪市 藤富 淀月	忘れずに盃も置く御霊前	同	同
夏まつり酔みその好きな伯父が来る	同	つむじ曲りの一人が組合代議員	大阪市 西本 保夫	同
補聴器で我が足音にめぐり合い	京都市 大久保 和三四	部下のない身分は真直ぐ帰るなり	同	同
ご近所を覚まして調子出ぬバイク	同	うちわ風なんだか知恵がうかび	松江市 岡崎 祥月	同
ボーナスで仕送り少しふやしとき	兵庫県 齋藤たけお	レディーファースト口と心	同	同
耕耘機嫁入り修業一つふえ	同	気安めの言葉も欲しくなる落ち目	愛媛県 小林 孝正	同
退院は急くなと友はハネムーン	羽曳野市 古川 静波	8ミリを拝見旅情をそられる	同	同
買収がバレて無口な村になり	同	お土産を先に配って里帰り	鳥取市 近藤 昭夫	同
竿の値に鮎が恐れて近寄らず	芦屋市 里田一十	残念会などと敗れた組も飲み	同	同
ビールはビール商標なんか気にせず	同	白バイが黄色いママに整理され	京都府 西村句楽坊	同
家計ピンチあしたも大雨注意報	仙台市 平野 光道	馬齢六十正誤の尺度にもなれず	遠野市 鈴木 二文	同
求人難息子は大学またすべり	同	化粧した妻へ冗談二つ三つ	羽咋市 三宅 ろ亭	同

スマートで
着心地良い



GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

への畏怖や求愛やセックスの歡喜
等人間の喜怒哀楽の表現にリズム
が伴って進化して来たものと思
う。

ところで進化した現代の踊りの
中で喜びの表現である笑い(微
笑)が踊り手の表情に欠けている
のはどうした事だろうか。

踊りの中にはおかめやひよっと
この面をつけたりコミックな化粧
をしたピエロのようなものもない
ではないが、ここで私が言ってい
るのは踊り手自身の表情である。
西洋のバレエ等にもやはり笑い
の表現が失せている。どうも笑い



よそ行きはトカゲ喰 <small>うま</small> な声ざます <small>会津若松市</small>	住吉 貞坊	迷うなとさとす言葉も借りたもの <small>静岡市</small>	多々良英舟
情熱をかけてた職場またかわり <small>笠岡市</small>	谷本鈍愚坊	化粧せぬ顔文学が好きという <small>羽曳野市</small>	石川 太柳
あれからを話す母娘の水入らず <small>竹原市</small>	山内 房子	焼香の列で宗旨を聞いて居り <small>笠岡市</small>	松本 忠三
親方の云う根性で負けが込み <small>高知県</small>	山川 勝子	一台で二合に酔える農繁期 <small>今治市</small>	越智 一水
お迎えのバスでエブロン皆機嫌 <small>茨木市</small>	高木繁太郎	アルプスへ情熱燃やす不孝者 <small>羽曳野市</small>	岡本紀太呂
幸せな笑顔つつんで盆おどり <small>羽曳野市</small>	不二 頑柳	名物の声が旅情をかき立てる <small>大阪市</small>	松川 美郎
洋酒の機嫌明治の教え唄 <small>神戸市</small>	吉田 隆史	コマシヤが出たッで蚊帳を吊りに立ち <small>福山市</small>	木山 昇二
お巡りが終日居れば事故は0 <small>大阪市</small>	山田松太朗	賞められたとたんにミスを発見し <small>西宮市</small>	鶴飼 鮎子
満月が野外映画へ明るすぎ <small>貝塚市</small>	護川 梢月	ウインクへ嫉妬する妻つい忘れ <small>岡山市</small>	鳥取 周甫
おこぼれのボーナス貰う順を待ち <small>河内長野市</small>	森本黒天子	あんな男が獣よと教えられ <small>羽曳野市</small>	岩井 紫貞
プライドがどうのこうのと喋る口 <small>松江市</small>	岡崎 雪美	生真面目か時代に合わぬまに老け <small>愛媛県</small>	村上 竹生
軽るがると抱いてやる気が重い孫 <small>大阪市</small>	万代句念坊	横文字のラベルに変えただけで売れ <small>奈良県</small>	北村 史陽
灰皿に気付かず女ばかりいて <small>新居浜市</small>	安藤 桂仙	料理屋が近いばかりに口が肥え <small>岡山県</small>	植高美佐子
面影を浮かべつつ墓の草を取り <small>金沢市</small>	根上 杏花	官庁への陳情にブン屋の顔もかり <small>岡山県</small>	岩道 博友
屋根の子をやさしくおろ <small>とも</small> 叱り <small>玉島市</small>	田辺 好女	織田作に会いとうなって法善寺 <small>大阪市</small>	増田 種男
目ざましへ明日のよき日を信じ <small>きり</small> <small>玉島市</small>	井上 旭峯	コップ酒をお茶がわりにと出 <small>きる</small> 客 <small>埼玉県</small>	神山 幸士
石植お山開き		ヒゲをそるだけの鏡を父は持ち <small>石川県</small>	南 伝一
雲海の巨巖に叫ぶ南無阿弥陀 <small>愛媛県</small>	村上 石峰	あてやかな後姿は振り向かず <small>愛媛県</small>	中川 一生
肩を組む男の心もうほぐれ <small>玉島市</small>	水粉 千翁	幸わせは男に惚れて惚られて <small>大阪市</small>	和田 旋鳳

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇〇円
送料(一冊分)二〇〇円の表現が欠けているのは不思議で
ならない。勿論これは絵画(漫画を除く)
にも言えることで微笑すら殆んど
見出せない。これは私だけの考えだが、これ
らの芸術では求真的緊張が過ぎ
て、結局いつの間にか笑いが忘れ
られたように思えてならない。これと同様の疑問を私は川柳に
も見出している。川柳の要素の
「おかしみ」が古川柳には十分に
生かされていたが、現代川柳では
このおかしみが非常に少なくなっ
ている。先に挙げたものよりはましだ
が笑いが減っている事は事実で、
しかも笑いは益々内面的になり、
傾向としては踊りや絵画と婦を一
にしているようである。その真因は私には判らないが、
もし踊りや絵画と同様に川柳が進
化するとしたならば、やがては川
柳からも笑いが消滅して終うかも
知れない。取越苦勞をする頭が
はげると言われるかも知れない
が誰方が絵画や踊りから笑いが消
えた真因をお教え願えないものだ
ろうか。

随想



長谷川三司

絵を描く運動というのがこの間、豊中の服部緑地で開催された。広々とした空の下、緑の木々の間でなんの制肘もなく、自由に絵を描くということは、老若男女を問わずたのしい愉快なことである。私も参加して久しぶりに絵を描いて見ようかと心に思っ居たが、宿病の神経痛が電車の乗り降りをおっくうにし、つい不参してしまつたが、元来私は子供の時から絵が好きで小学校時代、全国学童絵画展が大阪の美術館であつた時、学校を代表して二三の友達と出品したのが病みつきとなり、一生懸命に絵を勉強したものだ。その後、友達等が当時の松原三郎の画塾に通い出し、その塾展などで友達の見ると矢も楯もたまたまらず、親にせがんでもう一つの赤松塾に入学したのが反対され、絵を習うことは断念したが友達の見たり名を聞くともたまたまなく羨望の的だつた。

その後はもっぱら観ることで心をなぐさめ、あらゆる展覧会や帝展(今の国展)などは欠かさず京都まで行ったものだった。

絵といえば路郎先生も絵を描かれるそうだが、先生から直接見せてもらった事はないが。

ある時、溪花坊氏からこれが路郎氏の絵だというハガキ大のたぶん署中見舞か年賀状のようなものを見せてもらった事がある。

この間も私の外孫で美大を出て学校の先生をしながら画塾を開いている娘の家へ孫を連れて遊びに行つたら、ちょうど教授日とみえて子供が十四五人絵を習いに来て居た。私の孫も一緒に絵を描くと言うので画室に上つて孫を見ながら、そこに散らばっているクレオンを拾って描くともなく手を動かしてると、うしろへ廻つて来た孫娘に「お祖父ちゃん上手やないか」と笑われた。絵を観るのもたのしいが描くのもまた愉しからずやといいた。

愉しいと言えば川柳する事もまたたのしい、やれ川柳は詩であるとか無いとか、芸術とはとむつかしい事は抜きにして、ただ十七字をたのしむ心、絵を描く心と同じである。

絵を描く運動というのは今回が

初めてようだが、川柳は以前から市民川柳会の名で一般の人々に呼びかけ川柳普及に務めてはいるが、いっこうに集まらない。何処の市民川柳会に行つても既成の川柳家はかりの集まりで、正面にはずらりと兼席題が十五六題もながながと張り廻らして、初めて川柳を知ろうとして来た人、川柳を始めようかと思つて来た人々も一度でびっくりして、二度と来なくなるのではなからうか。また会場では初めての人に対して窮屈な思いをさせない思いやりが何一つとして無い。これなども考え直す時ではないかと思う。

一例だが市民川柳会と名乗る以上、まず無料にすべきだ。大阪の市民川柳大会(毎日新聞社)以外は何処へ行つても入会金というのか入場料を取っている。市が市民文化の一翼として川柳の普及に務め教育委員会が何かと予算を取りながら、何故有料にするのか予算が足りないければ予算の増額を願うのが川柳家の力であり、義務でもある。

私の地元尼崎にも市民川柳大会や阪神六都市川柳会がある。今回は伊丹の受持ちらしく、ふあうすとの銀界氏から選者にとの依頼があつたが、病気を理由に辞退した。これらの会も二、三回頃までは私もお世話した事があつたが、意に添わぬことがあつて地元ながらその後一回も出席していない。ここも例に洩れない会である。

絵はだれでも描ける川柳はだれ

でも作れる、きれいに描こう上手に作ろうと思わなければ紙と鉛筆さえあれば出来る。こんな愉しい川柳を、絵を描く運動ではないが市民川柳会も川柳を知る知らんは別として、誰でもが気安う参会出来るよう、会場のあり方、会の進行にも一考の要あり、一般市民に対するPRにも川柳家が本気で考えないと、いつの日か教育委員会も川柳にそっぽを向く時が無いと限らない。

軸吟について

堀内曉風

直原七面山氏は川柳雑誌七月号に於て、軸吟は自分が選句した句の中の天地人の三才の句に匹敵するとも見劣りしない句を、一句参考吟とし提出発表し、もし自分の句が、三才の句に対して見劣りするような場合は「軸吟はありませんと発表するのが選者としてのエチケットのようになっており、又軸吟は三才天地人の句に匹敵する句であることが絶対条件かとのように言つて居られますが、私はそのようには考えられません。

先ず第一に選者にされることに於て、種々の事情と場合があることです。例えば柳歴は浅くとも新進気鋭の作家で、例会に最高点を得た人は次の例会で選者となる規定があるような場合、長く年期を入れた先輩に比し選者としては劣

ることもあるでしょう、果してその選者が選んだ三才が選句中の秀句であるかどうかにも疑問を持つものです。軸吟は天地人に匹敵する句であるか否かは問題でなく、選者としての自信ある句を一句発表するのが礼儀であり、軸吟はありませんと逃げることは卑怯の極と存じます。

次に、軸吟は自分の句であるがために軸吟を決める場合選句に「迷」が生じ結局とんでもない迷句を軸吟として発表することがあるのでその場合に居合わせた他の選者なり句友なりの目を通して軸吟を決定したものが相当句も優れており云々と述べられて居りますが私は、自分の句の選にさえ迷うような場合、他人様の句の選などは以つての外で、軸吟どころか選者を辞退すべきであると存じます。

最後に、選者の軸吟が読み上げられる時、五七五の中、五七三までが自分の投句と全く同じなので「はてな」と思つていくと残りの二字だけが一寸違ふといった場合があるのですが、これも私は選者として考えなければいけないと思ふのですと、このことに就ては全く私も同感でありまして、二字や三字とある場合、同様の句でも、選句中にある場合は、出来るだけ遠慮すべきものだと思ふます。

以上の通り軸吟について私の意見と、あまりにもかけ離れていたものですから、非礼かと存じましたが率直に私見を述べて大方の御批判を乞う次第です。

評句

リレー



大阪府 後藤梅志
 大洲市 米沢暁明
 東京都 山根白星
 大阪府 早川清生

女房養える程の金で夜遊び

梅志 示されたこの句は、自嘲の句か、批判の句か、総てに弱いところを感じます。まだ結婚もしていない若者が、女房を養えそう

な大金で夜遊びをしているのを嘲っている。と解されますが、この人のは句の仕立て方に一流あり、老巧の人の手法をまねています。内容が陳腐で清新さが一つも無い。「女房養える程の金で」――

発音感覚を無視した文字を、こうならべてはお小言に似る。

暁明 独身者それは未婚か妻を亡くした男の生活を詠んだ句と解する。やもめとすればそれなりの味があり、未婚者と解すると又趣きが変わるにも思える。私は素直に未婚と取るのがよいと思うし、自嘲でなくて批判的な見方を

の両者間の事を考えると、余り理屈っぽくなるが、次第にピンと外れて来るのを覚える。川柳的感興もそれ程湧かないのは私だけであらうか。

白星 一つの句のモチーフが浮ぶ。それをそのまま詠みちらすのであれば、往年の大みそか祇宵句会でこれ位のものは百句や二百句は、たち所に羅列出来たのではなかったか。

この句、独身者か、やもめか、社用族か、はた又、自嘲の句か、批判の句かは、さて置き何れにしても、この句評リレーであげつらう程のものでは到底ない。「発音感覚を無視した」というより、むしろ路郎師の「生命ある句を作れ」を無視して安易に作り捨てている。句の良し悪しは別にして「僧は淮す月下の門」か「僧は菘く月下の門」か、淮すか、菘くかで、苦悶の末、身ぶり手ぶりで一夜を彷徨したという古い詩人の作

品への情熱と、執拗な愛着と、精神を想起してみるといい。

清生 私はこの作家の特異な作風がどう発展してゆくか深い関心をもっています。今のところ決して

みごとな成長ぶりを示しているとは言えませんが、作品のリズムに正直な形式を創造しようという努力と勇気を買っています。川柳の形式については本誌六月号に特集があり、執筆者の顔ぶれから言って定型に対する疑問の方が多く示

されましたが、実作者には定型を尊重しようという人の方がはるかに多いことは言うまでもありません。従って非定型の句を作るときは、とりわけ定型では表現できない内的必然性が要求されるわけ

る才能か意欲を持っている句いらしきものはするが、この句の場合合昔からいう「二人口は養えても一人口は養えない」という諺と安易に取組んだものでしょう。今の時代は仲々うっかり用意なしでは世帯はもてません。たまたみ一帖千円もする間借り貸では、二人口はとも高くつくでしょう。夜遊びでもしてまぎらかす若者はうようよして居るのだから、現実の面はこの句とチグハグです。作者に更に一步を進めた作句をお願いする。

暁明 二番バッターを引受けたが、流石三番四番打者の適評で梅志さんについてホームインか？今更何をか言わん。

白星 着想が平凡。表現が未熟です。作者にもう一度、焼き直しして貰えば、少しはましな句になるかも知れませんが、この着想では、いかな名人と雖も佳句に変形さすには相当骨でしょう。つまり川柳は「着想の稀少価値」が問題なのです。

▼エレベーターみんな出口を向いて乗り (失名失礼)
 ▼筒も八百屋へ来れば よりかか (失名失礼)

巧まざるユーモアに、ふき出して仕舞います。エレベーターの句にしても、誰でも経験があります。普通のことです。

▼妻の留守 一刻と 腹が立ち (失名失礼)
 ▼洗いようもない黒主や小町 なり (失名失礼)

う。この句は特に、一刻で生きていますが、ふっと頭に浮んだ「女房養える」云々では川柳にはなりません。「着想の発見」「表現の練磨」が川柳には必要です。おおいに、謙虚に切磋琢磨致しましょう。

清生 近作柳梅への提出二十句のうち掲載されるのはだいたい二三句で、これだけを見て直ちに作者の価値を云々するのは、まことに早計だが、拝見した限りではみなさんのご批評どおりどうも内容に新鮮さが乏しいように思われます。鮮度の少ない着想は読者に感動も驚きも与えません。観念だけの句も結構ですが、この句の場合は中途半端で、作者の立場や対象の描写が十分でなく、鑑賞にあたってとまどいを感じさせました。この人の作風が模倣かどうかは知りませんが私は模倣がどんな場合にも悪いとは思っておらず、その中から自然にその人の個性や持味がにじみ出てくるものです。

この作者が形式に関する意欲を内容にも示されて、すばらしい爆発力を見せ、どんどん新しい境地を開いて前進されることを心からお祈りします。私は創造の世界に決して拘束はないと考えているので

歌会始盗作
 洗いようもない黒主や小町 なり
 梅志 半分かったような分からな

いようなへんな句ですね。謡曲の草紙洗小町という曲はすべてが架空の事実という事になっています。この曲が出来ていらい大伴の黒主という人は腹黒い人の代名詞のようになっていました。また小野小町はこの清涼殿の新年歌合せの御会での帝より「水辺の草」という題を賜り「時かなくに何を種として浮草の波のうねうね生ひ茂るらん」という名歌を詠んだが、それははからずも黒主から古歌であるという抗議が出て悲しみの余り勅許を得て小町自ら万葉の草紙を洗ったところ、黒主の入れ筆した箇所はあと方もなく消えてしまったという華やかな作り事である。その曲の最後のかたりでは、黒主は自害をせんとしたが、帝から道を嗜むものはとかえてその熱心を賞せられたとかえってその熱心である。この古事と対照して作者はどんなところに憤激を感じたのであるかこの点不明である。恐らく盗作者も盗作者。選者もまた選者という所であろうが、単なる洒落になつたのは残念である。

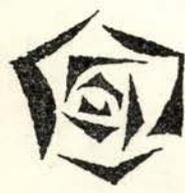
の場合には強いて言えば舞台装置満点、道具だてに凝りすぎて反って役者が、それを生かさなかつたという結果を招いた句と言えよう。白星正直に白状すると、梅志氏の編著ある故事の説明で、やつと判つたのだが、作者は憤激と言ふより、むしろ揶揄程度か。現代版で痛烈な非難もよからうが、意味が判つたからには、古川柳的な、一寸シャレタ句で、時事川柳としてまあまあという処か。前書に付ての批判は、「生命短き」時事川柳の運命として止むを得ないのではないか。尚この句で連想したのだが、昔日の路郎著「川柳講座」か？で古川柳の

▼指を切るからは九品の浄土までを、師は「極楽浄土」とするのは通俗で、「九品の浄土」と詠んだので、佳句であるとされていたと記憶するが、九品は、指九本にかけたもので、師の誤訳ではなかつたかと思うのだが、この句程度のかげ方程度であつてみれば、先にかつたままあまという句ではなからうか。それも故事に弱いボクの死角を突いたからかも知れない。

▼指を切るからは九品の浄土までを、師は「極楽浄土」とするのは通俗で、「九品の浄土」と詠んだので、佳句であるとされていたと記憶するが、九品は、指九本にかけたもので、師の誤訳ではなかつたかと思うのだが、この句程度のかげ方程度であつてみれば、先にかつたままあまという句ではなからうか。それも故事に弱いボクの死角を突いたからかも知れない。

▼指を切るからは九品の浄土までを、師は「極楽浄土」とするのは通俗で、「九品の浄土」と詠んだので、佳句であるとされていたと記憶するが、九品は、指九本にかけたもので、師の誤訳ではなかつたかと思うのだが、この句程度のかげ方程度であつてみれば、先にかつたままあまという句ではなからうか。それも故事に弱いボクの死角を突いたからかも知れない。

▼指を切るからは九品の浄土までを、師は「極楽浄土」とするのは通俗で、「九品の浄土」と詠んだので、佳句であるとされていたと記憶するが、九品は、指九本にかけたもので、師の誤訳ではなかつたかと思うのだが、この句程度のかげ方程度であつてみれば、先にかつたままあまという句ではなからうか。それも故事に弱いボクの死角を突いたからかも知れない。



ココロ
便箋

清生君みのお句はできた句だと思つたのですが、真向うから斬り下ろしたという時事吟らしい切れ味のよさが、ちよつと足りないようでどうも残念です。あの事件にはたれも苦々しさを感じているのだから、句の上でもう少し対象を追いつめるはげしさがほしいと思つた。前書もややもたれすぎた観はありますが、この程度は川柳の常態でもあり、いたしかたないかもしれません。また私の個人的な考えでは時事吟に表面だけの描写でなく、事件の内部にもう一步踏み込んで核心をどらえた社会性思想性を期待したいのです。なおみなさんの、ことに梅志さんの素養のゆたかさには敬服しました。(担当・真鍋一颯)



特集

私

の

秘

密

NHKのテレビ番組をマネたわけではないが、元海軍中将閣下と二十才は若く見えるというご婦人が不朽洞会員とあれば、これをそのまま見逃がすではないとおもう。

英国皇弟と毛じらみ

福井野迷路

編集局から「私の秘密」に何か書けとのことですがどこからバラたか「海軍中将閣下のころ」とある。私は明治二十五年生れで数えの七十一歳です。川柳の道にはいつて丸二年、初めは南区医師会誌の柳欄に投句して生々庵師の指導をうけていたが、どの句も叱るばかりで一つもほめてくれぬ。「一体あなたならどういう風に作るのか範を示せ」と言うたらその答に曰く。「せめて箸にか棒にからだでもよいからひっかかる程度のもを出せ」と来た。これにはあいた口

がふさがらず、更に発音ん勉強を重ねた結果、やっと杏林川柳会に入会させて貰った。爾来毎月一回路郎先生の前へ坐らされて苦心惨吟して居ます。

今年の川柳まつりで老先生のご挨拶の中に初心者がこういう風に指を折って五七五とよく勘定しますがと言われたが、あれは確かに私の手つきを学ばれたに違いない。その証題に手つきが私のと瓜二つだったので思わず吹き出ししました。

今年の川柳祭こそ天か地がとれると確信して出席しましたが、余り渡者が辛いので零敗だった。ひよつとすると郵便の未着かなとも思ったが、これが初心者に有勝のうぬぼれとわかり、この道の峻しさをひしひしと感じた。先生のお齡は私と余計違わぬが柳歴は六〇対二で同じ七十台でも正にピンとキリだ。祭宴席上先生の隣りに座って、六十年の柳歴を体温で感じとうろと思つた。そこで川柳踊りの最中に先生に「いのちある句」て一体どんな句ですかと愚問を投げかけた処、先生は真面目な顔で「作者はいつ死ぬか知れぬ、作者が死んでも名句は永遠にのこる、作者は忘れられても句はこの」の一言は先生に密着した体温と共に私の腹にぐつとこたえた。命ある句、いのちある句。せめてあと十年勉強すればとも考えるが十年すると八十一だ、とにかくあの晩は我国有名作家の雲集を一堂内に揮顔出来ただけでも私にとつ

ては大いに刺戟になりました。そこで私の秘密ですが、私の海軍生活中にはいろいろ面白いこともありました。一九一七年第一次世界大戦の後半頃、当時の英国ジョージ五世陛下（現女王の祖父君）の弟さんプリンス・オブ・コンノートが陛下のお使として大正天皇へ大ブリテン元帥杖を捧呈に来日された。

船途太平洋経由カナダへ軍艦でお送りした。洋上独逸潜水艦の警戒もあり二週間の徒然をお慰めする方法がない。顕微鏡でものぞかせたらと言うことになり、黴菌のほかに何か小さな生物をと種々掬させたが生憎、軍艦には昆虫が居らぬ。これを見るにみかねた一兵士が只今直ぐとって参りますと便所にはいつて自分の陰毛の毛虱を二三匹持って来た。

黴菌は生憎か淋菌しかない、これを見せた所陛下は淋菌は若者達には無理もないが、虱は艦中では不衛生ではないかとのご下問、いや実は毛虱（昔海軍では愛称KGと称す）と申し陰毛にのみ住み性交によってのみ伝わり性病に準ずるもので水銀軟膏塗布でなおり、軍艦の衛生には直接影響はありません、英国の艦隊にもこれを所持致す者もあるはずと思えますと答えた。

明和病院

川柳雑誌社支部
明和川柳研究会
指導 西尾 栗

支部長 西尾青一路

橋高薫風子 河相すむ
野呂鶴汀 樋口舟遊
酒井丹謡 塚田東雲
本城弦月 吉本善風
小浜留三 菱田満舟
木田正雪 門永三秋
山村正雪 川村山友
松島光一 村上球絵
樋口寿栄 安田義子
三上英路 村上夕鈴
池田文女 村上夕鈴
末沢花美 鳥本泰
山岡半歩 林夢虹
中橋川太郎 内海敬太
仲吉照児

支部事務所 西宮市上鳴尾町
電話①一三〇 明和病院内
電話④一七六七代

研究会事務所 西宮市川東町
電話西宮③〇七六七

・残暑御見舞・

当時英国軍部で重きをなした陛下もさすが毛虱だけは知らななどと感心、これがあとで日英両艦隊の笑い話になった。

後年コンノート陛下が南アフリカ聯邦総督になられた時、はからずも一九二三年丁度アフリカ巡航練習艦隊に乘組みクープタウン入港、総督招宴に列した。大戦中日本の巡洋艦新高が英領南アフリカ沿岸に出没する独逸潜水艦の警備に当たったお礼もあって大変な官

民の歓迎であつた。もともと殿下がユーモアに富み茶目気の多いご性格を知つて居たのであつて特別に拝謁を願ひ出た所、私の顔も名も思ひ出されぬ、そこで絶体絶命小さい声で毛虱の一件を申し上げたたら大きな声で、ア一毛虱の軍医だつたか、ベリーベリー、グッド、と手を握つて喜び宴後私室によはれてご歓待。

「あの節は愉快だつた。」よい勉

若く見られる

山川 阿茶

大正十五年十一月号の婦人グラフ(国際情報社発行)に私の口絵写真が出ていたのを見た編集局の一三夫さんが、
「スゴイ美人だつたのですね。なるほど才色兼備と書いてありますね。」

ここで一三夫さんは「私の秘密」を特集する企画をされたにちがいない。

「このころですね、男がみな阿呆に見えたのは」

と、若かつたそのころの私の何かを書かせようとするらしいが、ロマンチックな秘密であれば、ち

強をさせて呉れたとスコッチの古銘品オールドバーを沢山頂戴感慨無量でひき下がつた。毛虱で二回に亘つて教え込んでおいたから茶目氣満々の殿下が英王室下々の毛虱教育を徹底されたことを手にとる様に想像する次第である。

強情な虱とうとう古酒となり

ざつとこんなバカバカしいお話でご免蒙ります。

よつとは私という人間に奥行が出来るのでしようけれど、どうも生れつき開けっ放しの性格で秘密らしい秘密もなさそうです。

編集部から「お若く見える。秘訣でも」という殺し文句を頂戴しては一筆何か書かざるを得なくなつたわけだ。

皆さんが私を若く見て下さつて眞実の年を言つたら一応「嘘ばかり」とおっしゃる。十年米出入している按摩が「先生はいつも変られませんな、先生の体は普通の人より二十年若いです」よと喜ばせてくれる。話半分という事があ

るから按摩のお世辞を五〇彩差引いても十年位若く見えるのかなアと時々うぬぼれてみたりもする。

何か秘訣があるのでしようと言われるが、別に人魚を喰べているわけでもなし、露を吸うているわけでもなし、牛乳風呂に入っているわけでもありません。結局「呑氣」の一語につきるのではないのでしようか。この題を頂いてつくづく考えてみたのですが。

- ① 仕事を持って第一線で働いている事。
- ② 決して無理をしない事。
- ③ 係累のない上に呑氣な性質である事。
- ④ よく遊びよく眠る事。

これが私の処方箋でもありません。天職のメス持つエプロン古稀近く

阿茶 誰れも羨んでくれないのですから第一線で働いています。日進月歩の学問におくれなためには心に張りがあります。

阿茶 嚙脂着ていつまで生きる気ままにして

阿茶 叩きやみの喰いやみですから決して無理はしません。眠い時は眠るし、嫌な事は嫌、辛抱して気がつかつて人様にとめる事の出来ない人間なんです。夏になると午後一時より四時まで休診なんです

がその休診の看板がふるつています。

休診 午後一時より四時まで

患者以外の方も

御遠慮下さい

これを表のドアに貼り付けて鍵をかけておく。貴方らしいハッキリしてゐるわと皆が笑う。日曜日は絶対留守という事を徹底させて表を閉め切つてある。そうでないと足場のよい所だから客が多くて迷惑するので日曜日は家にいない事にしてある。氣を使いすぎると自律神経の失調を起しやすから心身共に無理をしない方針である。

阿茶 のほほんでする心配も忘れがち

阿茶 生来が呑氣な上に係累がないためその方でわずらわされる事が少し、その上自分一流の哲学を押し通して割り切つた気ままな生活をしてゐる。嚙脂のセーターも着るしお河童頭も平気である。笑う人には笑つて貰うつもりでいる。ありあまる程金も物もないが衣食住に心配はない子供病氣、入試や縁談等々の心配はないし、喰べたい物を喰べ買いたい物は、フトコロがアカンと言わぬ限り買

阿茶 フトコロがアカンと言わぬ限り買横槍が入るわけではなだれに遠慮も気がねもありませんし、余暇には本をよんだり川柳を作つたり小唄をやつたり字を書いてみたり麻雀したり、食物も神経質にならず何んでも喰べます。青い汁なん

かき抱して飲みません。魚肉、野菜の外に一日に牛乳二合、ヨーグルト、ブラッシー、那一個は欠かしません。鯉に天婦羅大好物。時々先々の事を考えねばいけないのと思ふ事もあるのですがすぐケロリと忘れて、ケセラセラである。

お昼寝が名高うなつて人が来ず

阿茶 寝る子は育つと知人は皮肉つてくれる。一年中昼寝するので有名でもある。日曜日は一切何もせず好きな事をして遊び次の一週間のエネルギーをチャージする事にしています。

阿茶 行末を思う日もあり朝の風

阿茶 戦前は知り合ひのバーからレモンのしほりかすを貰つて袋に入れてレモン風呂にはいってました。戦後はもっぱら朝風呂で水風呂に入りだす。これは血管のトレーニングだと思つて入るだけで西式にぶられてゐるわけではありません。コティだのヤードレー等の柔い上等の石鹸の香につつまれるのが何よりの朝の楽しみです。

阿茶 若く見えるのも結構ですが精神年齢も一緒に若いにはお手あげです。

阿茶 六等身お脳の方へこれつと



松風・村雨

富士野鞍馬

松風と村雨海女の玉ぞろい

(タル一四)

昔、須磨の浦に、松風、村雨という姉妹の汐汲女が居た。

文徳帝の時(八五二―八五八)中納言在原行平は、事あって須磨に謫居の身となつた。

配所でも粹なところは須磨の浦

配所でも須磨はいきまな所也

須磨の浦配所にしては粹なところ

左遷も忙びしく見えぬ須磨の浦

配所でもいたほのある須磨の浦

「配所」は流罪場であつて、

行平謫居の地を指している。

「たば」はいい女のことである

腰蓑も配所の眼には緋の袴

(タル一〇八)

腰蓑の上からつめる中納言

(〱二)

磯くさい娘と契るにやけた人

(万安九)

行平は汐汲桶を飯枕

(タル一一五)

指貫をぬげば腰蓑ひっぽどき

(〱一五四)

とも詠まれ、「腰蓑」は汐汲

の腰にまどう蓑で、「指貫」

(さしぬき)は、衣冠や狩衣

のときにつける袴の名である。

行平は五風十雨と決めたらう

(タル三九)

五日目と十日目須磨で御寵愛

(〱一二)

五風十雨で豊年の中納言

(〱三三)

行平は五風十雨にやせがつき

(拾四)

五日目に一度片側うれしがり

(〱三)

姉だけに十雨の方にふだん成

(〱四)

「五風十雨」五日目に風が

吹き、十日目に雨が降るのは

太平の象であると昔からいわ

れている。それに松風、村雨

をかけても作られている。

行平の一人で濡れる雨と風

(万宝八)

雨風でつらさをしのぐ中納言

(タル一四二)

面白く雨風にあふ中納言

(〱三九)

夜来風雨で行平は御つかれ

(〱八七)

雨降り風間いとしがる中納言

(万天五)

これはまた、雨と風になぞ

らえ、姉妹を共に愛するので

両方へ尻目をつかう中納言

(タル八一)

行平は塩温石を前うしろ

(万宝十一)

姉妹の中へ寝るから中納言

(タル八)

両方へわけて寝るから中納言

(コリ三)

等の句も作られている。

村雨を相談すくでさきへ寝せ

番ぐりを立ててしたのは中納

言

村雨の方がどうでも濡れ勝手

(タル一一)

村雨と寝た翌日松に突つつか

れ

格気の桶があたりあう須磨の

浦

雨と風雪に格気の須磨の浦

浦

という風に、姉妹の格気も想

像されている。

松風もはえきわまでは汐にな

る

「行平の中納言、三年はこ

こ

●疲労 ●食欲不振 ●神経痛 ●肩こり ●便秘 ●つかれ目

タケダ薬品

アリナミン

アリナミンF

り (タル四三)

おもしろく塩をふんだは中納

言 (〱一六)

行平はうしお仕立ての口も吸

い (〱一九)

行平は塩ものまでも喰い散ら

し (末四)

してやるも大きな事と中納言

(〱二)

よく腰がぬげぬと汐汲どもが

いひ (〱三)

と、江戸川柳家は想像を逞し

うしている。

つらい謫居も、松風、村雨

姉妹のために慰安され、三年

の年月が経った。そこで行平

は赦免になって、京都へ帰っ

た。「謡曲」松風に、

「行平の中納言、三年はこ

こ

に須磨の浦、都へ上り給ひしが、此程の形見とて、御立烏帽子狩衣を残し置き給へども、これを見る度に、弥益の思ひ草……」

とあり、烏帽子と狩衣を形見として姉妹に与えたと作られてあるので、川柳もまた、雨には烏帽子狩衣は風に遣り

(タル二八)
狩衣を薄きえにしの泣き別れ

(〃一一四)
着られもせぬものを中納言形見

(管初)
汐を汲む邪魔を二色のこすなり

(タル二六)
須磨の浦のこる形見に泣き明

石 (〃七八)
と詠んでいる。この思ひ草が、長唄「汐汲」に作られ、踊にも演じられている。

雨風で名残りの袖を御しほり (タル五七)
雨風で行平須磨を立ちかねる

(〃四六)
行平は餓へ二声いとまごい

(万明三)
また流されておいでよと二人

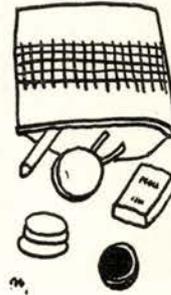
泣き (タル一六)
勅免のあとに女と千鳥啼く

(〃一八)
と名残りを惜んだことである。う。

帰洛のあと漁夫や船頭が口説

き (万天四)
中納言帰洛のあとは地下にき

川柳 女の世界 (二)



仲居

女の世界で女が心にもないことを言う女が多いのが仲居なら、客も負けず心にないことを言うこれが色街、陽気の世界である。男なんてみんないい加減なものだと仲居はよく言う、そのくせ、そのうちの一人の男性には、なんでも信ずることが出来るのである。男というものは一般にアテにできないものだと言っておきながら、その一人には惚れることもあるから面白い。

仲居さん知ってるくせにと
はけてる 春雄
酌をする仲居のうそへうそ
をつき 竹荘
甲斐性ない亭主を仲居持つ
ている 周太郎

などと川柳好士は余計な心配をしているが、伝説では、その後姉妹は尼になり、亡き母を弔い、行平の無事を祈ったということになっている。

水谷 竹荘

ものにする秘策仲居に授けられ
美秋
宴会がつづき仲居の膝が抜け
千舟
かけ持ちの仲居栓ぬき腰に
阿茶
さげ

女将

その仲居を取締って使っているのが女将であるから、仲居以上にしっかりした女が多い。
竹荘
口先で儲ける自信女将もち

仲居を口説く客もあるし、芸者に無理をいう客、帳場で酒の燗の加減まで気を使い、その上、客に満足をあたえて、うまく儲けるのは、女将の腕の見せどころというものである。

ようこそと女将火鉢の縁を
五葉
拭き
客席へ来ても女将は睨めまわし
たゞみ
遊ばしもするが意見もする
路郎
女将
同じ女将でも、待合の女将となる

と客の気に入る芸者を取持つ腕がなくてはいられない。そして首尾よくまとめるまでには、女将の言うことをきかない芸者もいる。
自烈たい妓だと女将の生欠
飴ん坊
仲
困らしてくれたと女将朝の膳
寿山

同じ女将でも、待合の女将となる
と客の気に入る芸者を取持つ腕が
なくてはいられない。そして首尾よ
くまとめるまでには、女将の言う
ことをきかない芸者もいる。
自烈たい妓だと女将の生欠
飴ん坊
仲
困らしてくれたと女将朝の膳
寿山

酒 清

灘・魚崎
大塚合名会社釀

そう嫌うものじゃないかと
女将来る 吞風
女将をば中継にして来る秋
波 八九寸

ホステス

昔、女給商売さりとやめてという唄が流行した頃もあった。その女給も今では名前が違ってホステスともいうし、レジー係、又は社交員、サービス係等々と呼ぶようになった。又、女給時代は皆白のエプロンをかけていたものである。そして募集するにも

募集札女給の下へさんをつ
平の字
お昼前女給は安く使われる
南北

秋淋などと女給の閑な晩
文久

だが時代は変わる、現代ホステス時代ともなれば、募集するのは大変である。固定給・指名給・背勤賞、それから努力精勤賞までつけ、訪問着まで借し、交通費まで支給するという、女の世界での一番華やかな職場となった。それだけに競争もはげしい、ダンスも上手でなければならぬ、一流のキヤパレーになるとホールで毎晩数組の男女が踊り華やかな夜をくりひろげるのである。その為かも知れないが、たしかに抱擁の好きな若い女が多い。抱擁とは、英語で「カレックス」という。カレックスとは、ただ抱くということではない、語源的には「愛する」ということなのだ。抱擁されるということとは、愛されたということなので

ある。だから男は性急であるから、すぐ抱擁、接吻、そのあとすぐに肉体の結合を考える、だがそれは相手の女によりけりである。抱擁が愛の行為の一つであつても、ただそれだけで性の前奏曲だとはいえない。

握手したのをウエイトレス 恩に着せ 迷亭 息をするような乳房を抱く

も恋 馬行

ひよっとして恋になるかも 知れぬ椅子 日車

笑顔していると惚れたと思 い込み 豆秋

お師匠さん

当然のようにお師匠さん朝 潮花

お師匠さんには、生活力があるから、どうしても自信の強い女が多いのである。夜おそくまで稽古をつけて寝るからでもあろう、又お世辞も上手である。このお世辞が商売の一つでもあるのである、「まあお上手、腕が上がりましたわね、エエもう何処で踊っても大丈夫、名取格よ、惚れられますわよ」なんて、お世辞をいって喜ばせるのも、女の世界の一つだろう。

もう名取ですよと師匠笑つてる はるを

お世辞とは知らずに踊るお人好し 竹荘

おサシミの値を弾きながら 師匠聞き 花川洞

けいこ場の恋を師匠は眼で 叱り 竹荘

ちょこなんと三人の児が師匠を見 雨吉

二号夫人 本妻の眼に明か明かと二号

邸 小松園 二号という不安定な地位は、ならかの自信を無理にでも、もたないかぎり、やり切れないものである。だからたいていの二号夫人は、経済的には独立して行ける自信を持っている女が多いようである。それに毎日のように、男と同居出来ない淋しさを、まぎらした

めにも、自分からその自信の中へ入り込んでしまう。そしてたとえ結婚は出来なく共、男に愛されて

いるという考え方、そして自分も誰れよりも愛しているという古風

なひとりよがりの考えをもった女が多いようでもある。

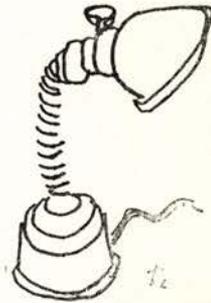
別荘を建てりや二号が欲しくなり 大介

一号になる野心なく安住し 多久志

二号とはいわれたくない舞 竹荘

扇 (つつく)

調停裁判官と川柳



今西生 薑

社会病患者ではやる調停所 という私の拙い句があります が、私も社会病患者の一人かも知れません。去る五月二十九日私もその仲間入りをしていました。

私の事件というのは私の貸家の前住者と調停申立人が結託して勝手に貸借権を譲渡して公正証書まで作り追究すると一時的の使用貸借だとごまかそうとしたので、一審では私が勝ち家屋の明渡しの判決が下りました。

被告は控訴する一方調停の申立をした訳です。法律から見れば調停側が調停を申立てるのは一寸おかしな話ですが、調停法ではこんなやり方に対して明確な法文が缺けています。普通調停申立中は控訴審が中断されるのですが、私の場合は形式上平行審理という事にな

大阪市民文化祭行事

短歌大会

日時 十月七日(日)二時
会場 毎日新聞本社講堂
講演 「源氏雑感」
村山 山 り

俳句大会

日時 十月二十七日(土)午後二時
会場 三和銀行本店七階講堂
講演 「季と気象」
大谷 東 平

主権 大阪管区気象台長
主権 大阪市・大阪市教委
関西短詩文学連盟

りました。丁度この日は第六回目の調停日だが、この日は担当調停官が二人共欠席だったので直接裁判官が調停に当る事になった訳です。裁判官から前五回の調停の模様を聞かれたが、申立人に判決の写しを出せと言われたのに提出せず少しも話が進んでいない事を申述べ私が判決書を裁判官に見せました。

判決書を讀んだ裁判官は高貴にもとすべきだろうが「相手が折角調停を求めている事だし、何んとかならぬか、人間は愚かな者だからね」と私に調停を求めました。

この裁判官の「愚か」という言葉からまたまた私の川柳観に話がそれた訳です。それを要約しますと、「私は川柳を通じ愚を追究し最近私は私なりに川柳を愚の詩と定義しました。訴訟等する事自身が是否は兎も角愚だと信じています。しかも愚というものはインテリの方が強いかも知れませんがと踏郎先生の

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

の句を引用し、善意の愚や反省のある愚なら調停にも応じます、本件のような悪質な愚は信義にも

とり、今後の貸貸借が面白くない。ただ差押え等の強行手段は考えてもよい」と述べたら裁判官も私の意のある処を十分に理解して呉れました。

当日の調停は相手方には弁護士が来ていたので次回は相手方本人が来るようにという事になりました。

相手方弁護士とは種の上町から大手前まで一緒だったが、私の愚の詩川柳観について種々の質問を非常に興味を持ったようでした。普通の民事裁判では一問一答式



下関川柳会の長老藤井米三氏は昭和三十七年七月十三日午前〇時四十五分、死因病名心不全（感冒、心臓衰弱）で水眠された。医師の初診は七十五日前から連続受診は四十五日間だった。八十三才五

現代柳人録

で、しかも口頭弁論を準備すると書いた準備書面で訴訟を進めるので傍聴していても訴訟は殆んど何をやっているのか解らないものですが、たまたま調停裁判官と話をする機会が出来、しかも弁護士にも川柳を理解させる事が出来て非常に愉快な日でした。

- (一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
- (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の

下関川柳会の長老

藤井米三翁逝く

中村 九呂 平

カ月の天寿である。

法名は「川柳院誠善勝道米三居士」この法名は米三翁のいまだ健在のとき本人がつくっていたものであった。

本年の一月四日に自分独りで近

趣味 (一) 配偶者の有無 (二) 川柳に手を染めた年月

(158) 山村 祐

- (一) 三浦祐嗣 (二) 山村 祐 (三) 東京都豊島区巢鴨六―一
- (四) 一九一一年六月七日
- (五) 静岡市 (七) 旅館業 (八) 九八二―七七〇〇・〇六八六 (九) なし (一〇) 人形劇・スキー・山
- 旅行 (一一) あり (一二) 一九五四年春

(159) 藤本 満年

- (一) 藤本 満年 (二) 満年 (三)

比佐志 (四) 岡山市住吉町二丁目四八 (五) 明治37年7月4日 (六) 岡山県久米郡久米南町下弓削 (七) 山陽放送常務取締役 (八) 岡山 二二二― (九) うぐいすに便りをしたい梅を植え (一〇) 読書・ゴルフ (一一) 有 (一二) 昭和十二年十二月より断続的

(160) 小沢 史葉

- (一) 小沢史葉 (二) 史葉 (三) 西宮市段上町八丁目十八
- (四) 大正15年5月2日 (六) 和歌山 (七) 電々公社社員 (八) 西宮五―二二一〇 (九) サボテンの

青さ南の旅にいる (一〇) 旅行・写真 (一一) 有 (一二) 昭和十八年四月

(161) 永松 東岸

- (一) 永松正義 (二) 東岸 (三) 岡山県和気郡吉永町大字福満九一四 (五) 大正9年6月30日 (六) 大分県岩佐郡高家村大字東高屋 (七) 農業 (八) 一 (九) 水仙のつめたさもあり未亡人
- (一〇) 二年前まで会社チームの捕手・野球・現在はおっぱら見聞読のみ (一一) 有 (一二) 昭和二十五年九月

誰はばからず堂々と発表のできることが非常に愉快だとのことだった。

文庫から、最後の筆と表記した中味、五、六枚の手製の帖面が発見された。

左の川柳（川柳のみで他に記事全くなし）が書き残してあった。ペン、鉛筆、毛筆と、「人生の果」の句から最後の「万象」の句までの年代が五、六年隔てているように見受けられたが、家族の人達もそう見ていたようである。

最後の筆

人生の果から既往振り返り八十年使い古るした骨と生き

夜が明けて睡するどく見直す日

只暑い寒いと言うて八十年周回皆枯れて一本冬木立老けて行く年齢を迎えて嬉しがり

身を低めて未だ生きて居る我を知る
明けまして芽出度くもない一つ老け
万象のしがをかくした雪化粧

(写真は藤井米三翁)



入門 講座

研究題「のこり」

清水白柳

残りくじ必ず当ると買わせられ
残りものに福がなかった空
くじ

6 残りものやっぱり僕につい
てなし 静水
1の句は座五の残り物が説明に
なっている。よい福はもうなきそ
うな、という十二文字はいいのだ
が残り物と言ったのは題にとらわ
れすぎたのではないかと思つた。
ここでは矢張り作者がその残り物
が何であるかをハッキリした方が
よいのではないかと思つた。2の
句は残り福、最後、年の市と三つ
も残りという題にひつつきすぎた
句語を重ねたのがいけなかつた。
面白さを強調しようとして失敗し
ている。3の句は御渡りの留守、
つまりみこしの出たあとの神社で
福笹を買ったというのだが、ハッ
キリした焦点がない。ただそれだ
けに終っている。4の句のあみだ
の一番高いのが残っていたという
のはよくあることで面白く思つ
た。句の構成も残り福でした。あ
みだの、と二段に切つたのも成功
している。5の句は残り福おろか
が誤解される怖れがある。思か

- 1 よい福はもうなきそうな残り物 K
- 2 残り福当てた最後の年の市 S
- 3 お渡りの御留守に福笹買つていき K
- 4 残り福でしたあみだの最高額 八郎
- 5 残り福おろか墓口まで拘られ 繁太郎

間違えられるかも知れない。作者は残り福どころかというつもりではないかと思う。それなればそのままに一字余つてよいから残り福どころか墓口まで拘られとした方がよいように思う。6の僕についでなしは佳いと思つた、やっぱりという四文字が生きている。
算盤が合うで一田出た不思議
一田がのこり会計苦勞する 隆史
一田の価値も明治の語り草 弘明
前の句の一田は大して気にして
いならしい、それは座五の出た
不思議という句語からそんな感じ
がするが、次の句の苦勞するはそ
の一田に悩まされているのである
後の句の一田は大型の旧一田紙幣
が残っていてそれについての思い
出なのだがこうしただけは明治生れ
だけの感傷にすぎない。
勝のこり金星あげた荒い息
爪先が土俵に残り勝名のり 井平
土俵ぎわ迄庄され大関よく
残り K
初めの句の勝のこりは勝名のり
でなければ座五の荒い息が生きて
来ないと思う。この句も題にとら
われた感がある。土俵ぎわ迄の句
の丁寧すぎるの説明調よりはいい、
わかりすぎるのはそれだけのこと
しか現われないので句に深さがな
くなる。
嫌われて嫌うて娘売れ残り K

もててもててBG売れのこ
り 文子
残り福とか言いますが縁談
ばかりは 八郎
嫌われての句はその通りなので
句にするにはそのままではいけな
い。嫌われた事、或いは嫌つた事
をもっと具体的に表現することに
苦心してはしいと思う。その点も
この句は売れ残つたBGの平素
の生活状態までも現わされていて
鋭い風刺がある。縁談の句は面白
いと思う、そこに親としての温い
思いやりがうかがえて佳い句にな
っている。
座布団にデザインの美を残
り布れ 八九寸 勝子
共切れが残り手提げにする
手豆
座布団の句はスラリと出来てい
るが平淡さを免れないようである
共切れの句は共布れと書くのがい
いのではないかと思つた。句とし
てはこれも平淡ではあるが女性作
家としての実感であるだけに共感
が持てる。
空金庫郵券一枚只残り 隆史
着想は面白いが、空金庫をもつ
と身近かな空財布に替えて、郵券
を切手として、空財布切手一枚だ
け残り、として見てはどうでしょ
うか。
1のこり香に未だ男への未練
見せ K
2名妓ののこり香五十路へ失
わず I
3 いい匂い残して芸者みな去
りぬ 静観堂

4 宿浴衣妻に女がまだ残り 和三郎
1はあまりにもそのものズバリ
で、ふくみがないから作品にいや
味が感じられて失敗作である。2
の五十路へ失つてしまったように受
取られるのを損な表現といえる。
3の句は淡々と詠まれていながら
読む者の胸になにか訴えるものが
ある。それは句を通して感じられ
るその場の雰囲気があるからであ
ろうと思う。4の句の女がまだ残
りに非凡なものを持っている。こ
うした句語は川柳家だけにしか判
らないと言われるかも知れないが、
年配の女房に湯上りの宿浴衣
に女を感じたのであって、この場
合の女には新聞小説の三分や四
日分の感じがあるのである。
親方はずませ残ることに
決め 辰始
老妻に居残りの汗いたわら
れ 一鶴
初めの句は面白いと思う。表現
方法もまずまずというところ、次
の句は平凡な出来事をそのまま詠
んだので句としては一応出来ては
いるが取立てていうことがない。
吸殻を踏み消す老の苦勞性
残り火の念を押されて仕舞
風呂 ひろし
残り火の火鉢かかえて待ち
ぼうけ 杏花
吸殻の句は老の苦勞性という説
明はまずい。他人の捨てたのまで
踏み消すのなればそれを具体的に
言つてはしかなかった。自分の捨てた

静観堂

のを踏み消すのは常識だろうと思
うから。仕舞風呂の句は着想が古
いので、句もバツとしない。実感
ではあっても、もともと苦し
んで句にしなければならぬと思
う。火鉢の句にも同じことが言え
るのである。別の観点から句の焦
点を求めることに苦心してはし
い。

逆箒立てるも知らず又のこ
り 周甫
実際にホーキを立てていないに
しても、長尻りの客。しかも又の
こるのは札つきの長尻ときてはホ
ーキも立てたくなるのである。よ
くうがっていると思う。

また耳に残るさげびに身を
切られ 生薑
深刻な心情を句にしていながら
胸を打つものを持っていない。そ
れは作られた句であるからだと言
ったら叱られるだろうか、どこか
空々しさが感じられるのもこの句
の弱点である。

遺すもの何んにもないが二
男二女 S
苦も菜ものこり少ない娑婆
の風 井平
二句共、老年の詠歎であるが二
男二女の句はもう少しという処で
惜しい。作意はよく判るのだが子
供に対する句か、世間に対する句
かそのネライがあいまいな処に弱
点がある。後の句はそのままの句
で素直なところが身上であらう。

梅忠は残りの二分で土産か
い 句楽坊
「恋飛脚大和往来」という梅川忠
兵衛のサワリを句にしている。二

金 泥 集

麻 生 菫 乃 選

「事 実」

事件記者事実へゴスの待った入り	阿 茶	聞き合せ事実はこちらと言いきり	同	迷宮の捜査メモから出た事実	同
ライバルに違反の事実握られる	同	事実とは思えない娘のニース	同	聞き込みの刑事喜ぶ新事実	勝 子
アリバイの事実には親はホツとする	同	否定せぬところをみれば事実らし	同	事実無根人の噂で家をもめ	同
探偵社事実へ心鬼にする	同	事実とはまるきり違う記事になり	カネ女	事実より輪に輪をかけたらマがとび	清 子
土性骨事実の前にも黙否権	同	貰い子の事実を知って家出をし	同	事件記者事実を追うて明けける	同
事実だったか追伸で詫びを入れ	きさ子	事実を知らず医博も罷で近く	同	夫への不信の事実募る日々	美 代
伝説の事実苦むす墓があり	同	実際を知っているのは二人だけ	小 石	お隣りの噂の事実を見てしまい	好 女
ゴシップにめげず事実の恋進む	同	左り前子にも事実を明かしかね	同	あちこちの新聞事実つかめない	周 甫
実話雑誌のファンと見たり涼み台	同	スキヤンダル事実無根とい切れず	同	怪談へ涙味も入れて事実めき	あいき
錯覚が事実と思うたあはらしさ	一 栄	調べ室妻子にふれて出た事実	春 栄		
		誤解だと知った事実を笑い合	同		

次回題「月末」 切九末日

十日余りに四十兩使い果して二分
残る」という二分で土産でも買っ
たであろうという作意なのだが、
こうした句は仲々むつかしいもの
である。私の旧作に「忠兵衛と立
退く草履買いにやり」というのが
ある。

残利息だけの通帳へ困扇く
れ 八九寸
いい着想であるが、残をザンと
読まねばならないので、私なら
「利息だけのこる通帳へ困扇く
れ」とするかも知れない。

封をした指先机の脚で拭き
R
のりが指に残ったのをこすりつ
けたというのだが以前にこの講座
で糊という題のときによく似た句
があったように思う。

売れ残り夜を越せない土用
餅 H
その通りでこれだけの事柄に川
柳する苦心を消費するのは勿体な
いと思う。ここから想を発展させ
てほしいと思う。

砂読みへ残り時間を聞く一
手 和三郎
砂読みに聞く余裕があるのかど
うかは知らないが、こうした緊張
した場面もあるだろうと想像して
作られた句ではないかと思う。

遺産だけあてに養子にと言
う 周甫
句意は言うまでもない。人間の
弱点をズバリついているのが大へ
ん面白い。勿論こうした句意はい
ままでにも多くあるのだが。作者
の実感として頂く。

身内だけ残り秘策を練り直
し 文子
いい着想でもあり、句も素直に
出来ているこうした方向に進むよ

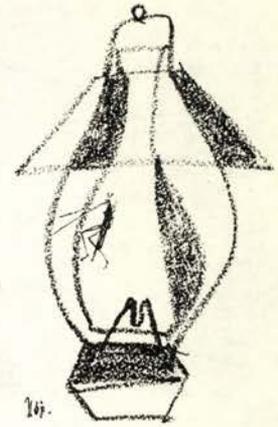
うに心がけて頂きたい。
地球全滅あなたと僕だけ残
りたい 光道
こんなことが有り得ない。それ
なのにみんながこう思っているの
だから世の中は面白いものである
。共感を呼ぶというのはいかに
た句に当てはまるのではないかと
思う。

貞操という字女にだけ残り
静観堂
名句として推奨したい句であ
る。若い世代には貞操などという
字はチャンチャラオカシイかも知
れないが、私にはこの句のもつ風
刺がピンと来ていい句だと思わ
れた。

二三人へべれけなのはまだ
残り 弘朗
酔うたのを送りそれから酔
うつもり 清風

懐の残り気になり御輿あげ
お世話する気最後まで残り 繁太郎
静水
ボロ儲けの不覚二日酔だけ
残り 八郎
酒に關しての句はまだまだあつ
たが取立てて問題になる句はなかつた。この五句のうち最後の二日
酔の句にはうがちがあると思つた
が深い意味をもつた句ではない。
残ったらうちにと末子もう
ねらい 辰始
食べ物の句も多かったがこの句
の素直さに優る句はなかつた。

次回研究題「みぞ」清
切 九月二十日
発表 十一月号の予定
宛先 大阪府南河内郡美
原町丹上四〇四
清水白柳



16.

—

路

集

正本水客選

つぶし値

母の形見がつぶし値になる落ち目
親の家つぶし値で売る子に育ち
拾い屋の立話は銅像のつぶし値
つぶし値でもよい早く持つてゆけ
つぶし値の骨董品を大事がり
つぶし値で見積りや人間は安いもの
つぶし値にしてもと悔む被害品
つぶし値へ信用できぬ客の顔
つぶし値の品さずものように見え
つぶし値とはあんまりともめている
つぶし値も同じに値切つて買ひ占める
つぶし値の雛へ誰も手をかけず
つぶし値より安いと大道のたき売り
つぶし値をつけたかねと手を洗い
つぶし値に見積りましてもうまくにけ
つぶし値で買ったつもりが高うつき
つぶし値にしてもと朝市強気なり
この値では放すに惜しい気がおこり
つぶし値にしても私は十七貫
つぶし値で買ったカマドで買をとり

隆 元 句 判 博 弘 晃 祥 雪 杏 石 愛 光 秀 和 三 勝 郎 亭 虹 要

つぶし値にしてもやつぱり金は金
つぶし値と言われればユームおこてる
つぶし値にしてもと財布もつくる
つぶし値で売るには惜しい細工
いれずみもなびて飯場の飯を炊き
つぶし値で案内妻が承知する
つぶし値で人肉の資源に数えられ
つぶし値も思惑以上にこうてくれ
つぶし値で売るには惜しい難儀になり
つぶし値のなんだか曰くありそう
つぶし値にもなりませんが軽くにげ
つぶし値にもならぬと人間はかれる
つぶし値で取つて新品置いて去に
つぶし値にしてもと素人あさましい
つぶし値のまままで居眠る在庫品
条件の裏がありそなつつぶしの値
弱腰へつぶし値でもと恩にきせ
つぶし値は可哀想だと邪魔が入り
つぶし値の難冷たい眼で買われ
不仕合せつぶし値で売る古道具
盗品をつぶし値で売つて足がさ
古物屋は一応つぶしの値ぶみをし
商売気皆なつぶし値にしか見ない
つぶし値で買った單車で足を折り
つぶし値で恐れ多くも質に入れ

種 宗 周 藤 清 保 野 千 庸 静 痴 頑 一 大 八 涼 繁 弘 不 旭 好 季 紫 紀 太 孝 風 身 郎

つぶし値という口の端にひつかり
つぶし値で売つて新品でんと据え
つぶし値へなるようになれ妻揚子
定年の課長つぶし値で買ひとられ
つぶし値で買つて顧問にまつりあげ
弱り目のつぶし値へむごいニセ手形
つぶし値にしてもの重さ手で計り
つぶし値をつけて今さら断れず
つぶし値をさげすむも博士の目
つぶし値で憎い男の指輪 売る
つぶし値にしては白金台
運賃がいるとつぶし値でも買わず
見守られる中で屑屋のチギがはね
つぶし値で買う気の古着屋難をつけ
つぶし値へ妻の未練は提げてる
つぶし値にしてもいささか腹が立ち
スクラップで売る値に涙金をくれ
つぶし値で引取り一度もうける気
つぶし値の管二階での人殺し
つぶし値に似た退職金で職追われ
つぶし値で買ったスクラップにしようけ
つぶし値で買ったイヤ静かに台へ置く
つぶし値のギターに屑屋音を立て
つぶし値で買つて蒐集家を探し
つぶし値がややくはバタバタ廻わし
つぶし値に言うときどき怒られる
つぶし値も案外高い金の価値
つぶし値のがんにがらに縄をかけ
つぶし値で売ればいくら金になり
部品なら売れるとつぶし値で叩き
今買つてもつぶし値使うときまはれ

久 圭 九 瑞 八 木 静 水 雄 々 惠 二 十九 求 女 初 甫 代 仕 男 与 太 郎 光 郎 葵 丘 同 幸 士 同 蛙 水 同 宗 太 郎 同 雄 声 同 卵 之 助 同 生 薑 同 静 水 同 雄 々 同 惠 二 朗

つぶし値で売るにも見積書を出させ
つぶし値も考えながら嵌めてみる
置き場所があれば僕も欲しかった北野組
囑託の辞令つぶしの値が決まり
つぶし値をはがゆがってる第三者
人
海軍をつぶし値にしてサルベージ
地
つぶし値を掛ける秤りの大まかな
天
つぶし値と聞いて一桁読み違い
軸
賞罰なし つぶし値に甘んじる 水客
P T A
役員会は料理屋でするP T A
P T Aバックに町議の立候補
P T A井戸端会議に似た形相
世話すぎがP T Aの長も兼ね
P T Aだけ楽しみの和服きる
着たきりすすめP T Aに縁がなし
P T A口のたつのがかきまわし
子供三人でP T Aの最古参
P T A役員の子はみんな出来
P T Aアラマア先生がお茶をくみ
見栄だけを張り合っているP T A
P T A父の来るのを子は嫌い
P T A校長さんを尻に敷き
P T Aザーマス組がよく喋り
P T Aまたも終りは寄附のこと
よそ行きの言葉をこなすP T A
悪い遊びP T Aの話題にし
校舎新築P T Aに荷がかかり

十九 圭 求 史 初 王 代 仕 男 与 太 郎 生 薑 博 友 幸 士 旭 峯 孝 風 旋 風 野 迷 路 判 志 光 郎 与 太 郎 句 念 坊 秋 月 雪 美 弘 道 宗 太 郎 勝 子 杏 花

石川侃流洞選

選挙には無関係ですとPTA 保夫
 校長がPTAの機嫌とり 淀月
 PTA後のプランは派手に立て 季費
 PTA見合に行くのじやあるまいに 八郎
 PTAお次の寄附が気にかかり 八郎
 PTA教師と歩調合わせぬなり 祥月
 PTAおばあちゃんにはDDT 野迷路
 PTAおそい子ですと白髪でれ 元照
 PTAさきよう給食のお手伝 紫貞
 PTA同じ顔ふればかり寄り 一鶴
 PTA寄附選挙に如才なし 雄声
 エプロンの下盛装のPTA 庸佑
 校庭の整地へPTAの汗 ひろし
 膳立にPTAがついて来ず 九呂平
 こと寄附にPTAの静かなる 圭井堂
 PTAテレビで困る子の勉強 秀峰
 PTAママ青春を得た化粧 ほか平
 先生思想にもめるPTA 雄々
 PTA余談になつてよくしゃべり 紀太呂
 十代の話題にこわいPTA 太柳
 PTA会長自腹を切つて無事 藤波
 先生は革新PTAは保守 同
 PTA儲かりまつかで話題それ 雄扇
 PTA今日はお酒が出てだけ 静水
 PTAママにまかせてババ昼寝 どんたく
 PTAババはさつぱり無関心 紀太呂
 好成绩そんなら行くかPTA 頑柳
 PTA出費多端がつづくなり 弘朗
 先生の恋へPTAがもめ 素身郎
 PTAまでに主流派反主流 十九平
 分校のPTAは車座になり 惠二朗
 個々面接PTAの泣きどころ むじな
 券売りをしてPTAの委員です 瑞歩
 PTAへの熱意洗濯物たまり 八九寸

料理屋

橋高薫風子選

地 つつましくPTAの隅の母痴亭
 天 PTA小さな椅子で聴く講話 清風
 PTA寄附の高から役がつき
 料理屋で自分のうわさ聞いて去に 博友
 料理屋の品でも差し入れ味がなし 秋月
 パン食にして料理屋へご無沙汰し 同
 料理屋をやつてふたりになびがいら 句念坊
 料理屋か最高点で出た町議 藤波
 飲む程に料理屋だけで済ませず 八郎
 料理屋の滞納してる顔でなく 圭水
 料理屋を開散にして選挙中 光道
 初めから料理屋の方安うつき 秀峰
 すみませんねと又料理屋で待たされる 隆史
 料理屋のしこりのれんで飲み直し 光一
 財界に縁あり代々の小料理屋 保夫
 料理屋の味テレビでは一寸無理 野迷路
 料理屋の女将アツパツバでパイとなり 同
 小料理屋でもとじわじわくどいて米 庸佑
 扇風器向けて女将は引き退り 与太郎
 料理屋の二階で今日もパイの音 静波
 料理屋に借りのあるのが先に立ち 淀月
 座るなりあら煮き通す顔馴染み 圭井堂
 新米の仲居と知らず鮎の骨 同
 引き揚げてチャチな中華の料理店 光郎
 料理屋でいつも女房の愚痴を言い たけお
 料理屋で見栄をきつてる交際費 涼人
 板前にチップを弾むふく料理 同

料理屋の昼へ間抜けな三味が鳴り 大八洲
 この店か中村君の来た店は 句楽坊
 料理屋がもう知ってる社の人事 木魚
 錦ちゃんののれんが下る小料理屋 鮎水
 一流の料理屋静かに音もなく 同
 おしんこが大好き料理屋の娘 虹要
 料理屋で目刺しのあてで飲んでくる 瑞歩
 金魚酒飲ませた料理屋とは見えず 同
 料理屋のついで今更飲んだ数 どんたく
 料理屋の気炎も消えて家近し ひろし
 料理屋の灯に傷心がすい込まれ 雄々
 料理屋へ来てから意見百出し むじな
 町議二期料理屋のママ腰を入れ 石峰
 一軒の料理屋島の景気見せ 十九平
 ステテコのまま料理屋へホスが来る 同
 料理屋の娘で政治に興味を持ち 同
 料理屋の暇は女将も出て涼み 代仕男
 こいさんの居ない料理屋法善寺 紫貞
 料理屋で飲んで騒いで馬鹿な金 卯之助
 料理屋じゃ尻に敷かれた顔でなし 弘朗
 料理屋の前で自家用せかす待ち ほか平
 料理屋で金の成る木を見せたがり 同
 料亭で夜の政治が続き居り 紀太呂
 それとなくヒントを料理屋で与え 素身郎
 浪人してもまだ料理屋でつけがきく 旋鳳
 料理屋へ上つて逆に料理され 痴亭
 小狭いがここの料理は食わせるぜ 句楽坊
 酒煙草やめ料理屋でまがもてす 頑柳
 料理屋に生れて料理屋を嫌い 旭峯
 料理屋が顔のきくのが不倅 勝子
 料理屋が二軒ならんでよくはやり 雪美
 料理屋は伯父の養女にして嫁かせ 周甫
 ライシヤワッパ家の膳もころえて 淀月
 料理屋の養子がそとで酔うてる 千翁
 広重の生きたに酌がれ京料理 八九寸
 料理屋にきてごもつごもつごもつ 宗太郎

色紙短冊
 書画用品
 大坂戎兵屋
 丹精堂
 中セニセニ

こつと来た料理屋を派手に出る 同
 料理屋でできる政治がまだつき 葵丘
 料理屋で妥協政治ができあがり 雄声
 佳 料理屋の味覚女房を刺戟させ 石峰
 料理屋で飲む酒の味妻が聞き 九呂平
 農夫吾れ料理屋で腹みち足らず 光道
 庖丁の刃えをとり木で堪能す 野迷路
 もの足りぬ料理器の底にもり 静水
 料理屋で口紅直すほどに馴れ 好女
 料理屋も看板だけの村の夏 孝風
 人 料理屋の女将の過去を知つて飲み 初甫
 地 料理屋で母の日祝う自家用車 惠二朗
 天 料理屋で名士の軸が安っぽい 愛鳩
 軸 料理屋に戦後の影はすでになし



柳一界一展望

句会

▼本社九月句会は七日(金)午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。当夜は忌日を繰り上げての川柳忌句会であり、恒例の新選者発表が行われる。柳縁につながる柳人多数の御出席をお願いする。▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪市)納涼句会は八月十九日(日)午後三時から阪急沿線真面のつる家で、安岡珊枝郎医博移転壮行会、河村瑞川医博婦日歓迎会を兼ねて開催。▼南海電鉄川柳句会(大阪市)は八月十六日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)句会は八月十七日(金)午後五時半からコクヨ株式会社で開催。▼大阪通信病院句会は八月三十日(土)午後五時同病院屋上で納涼句会。以上路郎主幹出席。▼川雑大鉄局支部神戸みなと句会は七月二十五日(水)午後六時から国鉄須磨駅構内須磨変電区で開催。▼第十一回東北川柳大会が、河北新報社・川柳宮城野社共催で十月七日(日)午前十時から仙台市東二番丁、河北新報社別館ホールで開催される。宿題(一題二句)か

ら箱(一字選) 痛い(南谷子選) 天下一品(閑人選) 深い(維想楼)

清物(月華子選) 地下室放浪児選(尻上り(夕帆選)。特別選II事件記者(中央選者交渉中) 席題選者(当日発表)、賞各題特選三名及び高

点者二十位まで。出席出来ない方の切は九月末日、百円封入下記へ、仙台市東八番一七〇後藤閑人氏へ。▼ひろしま川柳句会は七月二十日(金)午後六時から広島駅二階会議室で開催。▼第三回名古屋短詩文学祭川柳作品集募集要項は、近詠三句をハガキ又は同型紙に記入、川柳と明記、住所氏名雅号を書き八月三十一日までに名古屋市中区南外堀町名古屋市役所社会教育課文化係宛。▼第二十七回秋田県川柳大会は九月十六日(日)午前十時から秋田市秋田県労働会館で開催。兼題は雑詠(選者別三題)・俄か・勲章・ボケツト・濡れる、各題三句、投句は百円封入の上秋田市土崎港御蔵町市住三号佐藤万秋田県川柳大会宛。▼第二十三回九州川柳作家大会は九月二十八日(日)午前九時から福岡市福岡放送局で初代川柳忌を兼ねて開催される。兼題、極楽・風呂敷・女医・白髪・けち・土曜日・一本道・ひらかな・甘党・江戸(時代吟)・にぎり飯・太陽。

▼夏をたのしむ会は八月十八日(土)午後九時から京都嵐山渡月橋南詰虚空蔵山法輪寺で徹夜の会を開催、主催は平安川柳社。▼第六回下越川柳大会は八月十二日瀬波温泉国鉄寮で開催。▼第七回新潟市川柳大会は九月二日新潟市駅前労働者福祉センターで開催。▼第七回川柳有珠の集いは八月二十五日午後二時から登別温泉街国鉄療養所で開催。▼川柳きやり吟社(東京都)九月の句会は一日(土)午後六時から神田東紺屋町、毫撰寺東京別院で開催。▼川柳宮城野会(仙台市)句会は九月十六日午後一時から木ノ下四一青山蠟牛居で開催。

消息

▼路郎主幹は七月二十日から二十七日までの八日間、第十六回青森川柳大会への旅に出られ、大会後は十和田湖、仙台、東京へ立ち寄り各地の柳人諸氏の歓迎を受けられた。橋高薫風子氏と藤村友女氏の二人が随行した。▼村田周魚氏(東京都)は七月二十六日路郎主幹を囲む歓迎会に元氣な姿を見せられたが、近く第二句集を出版される運びになっている。▼川上三太郎氏(東京都)は病気のため近く慈恵医大附属病院に入院加療せられる体にも拘らず、路郎主幹の歓迎の席に出席された。一日も早いご快癒をお祈り申し上げる。▼清水白柳氏(大阪府)は七月二十二日、山伏で有名な霊場大峯山へ登られた。「ガム噛んで敵

若心経となえけり」▼橋本緑雨氏(大阪市)は七月二十一日から、姫路、奥津温泉溪谷、人形峠、三朝温泉一泊、東郷湖、浜村での鯛網、浜村温泉一泊、鳥取砂丘、戸倉峠を経て帰阪のバスの旅を楽しまれた。▼中島小石さん(大阪市)は八月五日から、令息夫人と愛孫同伴で十七八年振りの山中湖に遊ばれた。聞きしにまさる賑いに驚いておりますとの句信があった。「富士丈は昔のようにそびえ立ち」▼尼緑之助氏(出雲市)から、「当地の川柳まつりは来る二十五日夜、神戸川漁業協同組合で神戸川の涼と養魚場視察を併せ開きます」と。▼小西富士子さん(兵庫県)から、今秋十月一日、篠山にもヘルスセンターが開店されるので揃ってお出掛け下さいと便りを頂戴したが、追っかけて夫

一 新進作家の川柳句集 一

橋高薫風子著 麻生路郎序

川柳句集 有性

定価二百五十円 送費七〇円

▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って採まれ、川雑編集部員として精進を続けている。前途ある好作家である。

約七年間の習作「有情(うじょう)」を上梓して弘く世に問うことにした。

★出版予定日 九月初旬。

★五〇〇部限定版につき御申込は早く。

★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。(切手代用可)

大阪市住吉局区内万代西5丁目25
発行所 川柳雑誌社
電話大阪(67)6081振替口座大阪75050

君の無鬼氏からも篠山ヘルスセンターの美しい完成図の絵葉書が届いた。二千人収容の娯楽センター

葉光・山本佐一が七月十一日午後十一時十分水眠いたしましたので生前ご交誼をたまわりました方々並びに告別式にご焼香下さいました川柳家の皆様へ本誌上を藉り厚く御礼申述べます。

大阪市東区野区王子町二丁目五十三番地

兄 山本幾太郎

不朽洞の人々



氏川西にての龍の明

少年の日の私を「大器晩成型だ」と、評した教師があった。

以来久しい間、なんとなく自分もそう信じて生きて来たが、漸く老境に入ろうとする此頃になって、大器でも晩成でもなく只の凡くらに過ぎないことを、はっきりと思い知らされて、実に索莫とした気持である。晩成を信じてくれた恩師の為にも、凡くらなりにせめて一歩でも前進したい。

つい五十いまいまにと未だおもう

(晃)

新刊紹介

飯降白香さんが、飯降梅子歌集室生川を昭和三十七年八月五日に京都市東山区三条通白川橋東五丁目初音書房から刊行された。川柳不朽洞会員の白香さんは古くからの團秀歌人で、二両親の金婚式に祝意を表するための贈物として出されたもの。B6版一六一頁、定価四百円、送料百円。

二日は帝釈映を見物、倉敷へ出た後、駒を鑑賞して帰られる。又、九月初めには北海道の旅に出る予定である。「散歩よし溪流沿いの緑蔭を」▼奥谷弘朗氏(倉吉市)は倉吉川柳会会長であった故大前鳴悦氏の跡を継ぎ、新会長に就任され、二月号以来休刊の柳誌「打吹」を八月から再刊されることになった。発展をお祈り申し上げる。▼若本多久志氏(西宮市)は七月十二、十三日の両日、ライオンズクラブの会合で徳島へ行き、初めて見る阿波踊りにいろいろな意味で感心された由。「ぶきようは踊らにゃ損を見てばかり」▼西尾英氏(八尾市)は七月十八日不朽洞に路郎主幹を訪問、主幹の長途の旅行中の無事を祈られ、留守中の事務の打ち合わせをされた。▼越智一水氏(今治市)は八月六日広島島の原爆慰霊式典に参加、平和への願いをさらに強く心に刻まれた。「宣言へ場よ飛べ飛

べどこまでも」▼西いわを氏(大阪府)は七月二十六日、大阪今橋クラブの会員四十名を浜松の日本楽器に案内、新しい楽器電子エレクトーンに演奏を紹介したり、ポルトに試乗したり、一泊の旅を楽しまれた。▼真編一瓢氏(大阪府)は七月下旬、肩の傷の手術後寝冷えをとれない、三十九度以上の発熱が続いたので、子供達に言い残す事まで考えているうちに解熱、一寸味わえぬ銷夏法でしたと。▼山田季實氏(高槻市)は八月六日職場の打ち合わせ会議のため有馬の国鉄有馬保健指導所で過ごされた。「公用のついで有馬の湯にひたり」▼小泉繁峰氏(八戸市)は第四回蝶五郎賞を青森県川柳連盟から授与された。はちのへ川柳社創立以来斯道に貢献されたことによる。▼直原七面山氏(岡山県)は神経痛のため病床に呻吟して居られるが、こういう折にこそ生命ある句はどうして生れるか

を真剣に考えられる時だと思おうと寄信された。▼杉本一鶴氏(貝塚市)は編集局への署中見舞状に「炎天下夢で車をぶつ飛ばし」の病床吟を寄せられた。▼清水白柳氏(大阪府)は伊東温泉川柳会の機関誌「潮ふき」創刊号発行の祝辞を同誌に寄せられた。「双手をあげて産声にこたえたし」▼橋高薫風子氏(大阪府)藤村女さん(大阪府)は路郎主幹に随行して青森川柳大会に出席された。

★川柳誌史の資料として各柳誌創刊号を蒐集しお譲り乞う
東京都目黒区芳窪町四一
奥津啓一郎

家を主催の歓迎会に行く三十分前という時をお便りしています。先生元氣です。昨夜は山根白星氏が銀座へ案内して下さり氣焔を挙げました。瓜辛氏も合流しました。▼川上三太郎氏(東京都)は八月三日慈恵医大附風病院へ入院、腸切除の手術を受けられた。速かなるご快癒をお祈り申し上げる。

句集

▼池田竜歩遺句集が昭和三十七年六月二十八日函館市青柳町十七函館川柳社から発行された。昭和二十九年から川柳を作句、本年度国鉄文芸年度賞川柳部門の一位を獲得した。函館川柳社編集同人、きやり社人。遺句七百十余句が収録してある。B6型、百十四頁、定価百円、送料三十円。

電話番号変更
▼市場没食子氏の自宅の電話番号が下記の通り変更された。大阪七一六局七〇〇七番。

行楽の秋
趣味の集りに、吟行に、御宴会に、御家族連れれの御清遊に御越し下さい。

もみじの名所
竜田大橋下車
電話竜田一六二
料理は一流値は三流
酌は有芸仲居揃い
竹青の店

正誤
▼前号四十三頁下段四行目の句、才女たりとあるは、才女女たりの誤りにつき訂正。▼前号表紙裏の広告、大阪市民文化祭川柳大会の兼題「手相」は「出世」変更されたので訂正する。▼前号四一頁二行目思いのころは思いのこのすの誤りにつき訂正。



「口癖」入選発表

選者 麻生路郎先生
投句総数 五百七十二句
入選 四 十句

口癖がまだ出ませんねえと酌いでくれ
子を思う口癖独り言になり
玉島 千翁

口癖のたばこ一本おくれんか
大阪 城東

口癖はせめて娘に飲まぬ人
大阪 松太朗

口癖の暑いで罰金またとられ
大阪 琴女

口癖もいつしか角がとれており
福 福郎

口癖さえ貧富の幅は争えず
素 素郎

口癖になって願いが叶えられ
大 方

口癖も父そっくりの父代理
大 生々庵

口癖を真似ると仲居眼で叱り
奈良 仙甫

口癖に戦死した子のよさをほめ
清 清風

陳笠のくせに岸君池田君
大阪 弘村

口癖と知らず台榭打っており
柳宏子

わしが死んだらと言う口癖にうんざりし
一ノ十

口癖になった公約果たされず
不二夫

口癖を真似られ娘吉を出し
藤 波

チンピラの口癖で言うガイド下
西宮 牧人

口癖に好きだ好きだと言ひ寄られ
子 雄々

口癖のように養子をこきおろし
子 雄々

むかしはむかしはと明治生れなり
大 晃

口癖に言うたロダンを見ずに死に
大 晃

口癖のまた来てねえを本気にし
口癖を真似られるほど顔が売れ
十円十円と行儀の悪い子に育ち
小商人その口癖に資金難
奈良 凡茶

口癖に言うてた通り酒で死に
口癖がついて出てもたバスガール
神 静馬

口癖が出ず側近の気を揉ませ
大臣の口癖マスコミもう書かず
山 十九平

口癖が入れ歯してからはつきりし
台本にない口癖が出てしまい
大阪 一三天

口癖に父人間になれと言う
口癖をニックネームにされちまひ
大阪 阿茶

口癖の叱言竜頭蛇尾になり
口癖は子のままごとと教えられ
大阪 柳志

所謂を言わんと言えぬ癖があり
わたくしは嘘は申しませんと言う
首相
大阪 梅里

昇給を口癖にする社長だが
地ノ句
忠 三

そのうちに飲もやで今日も帰えら
され
神 静馬

阿呆くさやへエオキニとつい妻
に
大 晃

★大万
コーナー★
十月の息
抜きから
切りを毎
月十日に交
更いたしま
す
まちがいの
ないように
梅里

昭和三十七年度(八月現在)

大万川柳ベストテン

- 一 静馬 一五〇 神戸
 - 二 藤波 一四〇 岡山
 - 三 晃 一三五 大阪
 - 四 梅里 一三〇 大阪
 - 五 柳志 一二〇 大阪
 - 六 十九平 一一〇 岡山
 - 七 圭水 一〇〇 堺
 - 八 方大 一〇〇 倉敷
 - 九 清人 九五 大阪
 - 一〇 狂二 九五 堺
 - 一一 生々庵 九〇 大阪
 - 一二 恒明 九〇 大阪
 - 一三 文秋 八〇 大阪
 - 一四 きさ子 八〇 岸和田
 - 一五 清生 七五 三島郡
 - 一六 水客 七〇 大阪
 - 一七 遠二 七〇 笠岡
 - 一八 恵二朗 六五 児島
 - 一九 圭井堂 六五 堺
 - 二〇 素郎 六五 堺
- 梅里報
- 次の兼題「チャンス」五句以内
- 〆切 九月十五日
 - 発表 九月二十日
 - 〆切 十月十日
 - 発表 十月二十日
- 投句先 大阪市阿倍野区松崎町
三ノ十 大万川柳会

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも心に
くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

高島屋
なんば本館
大阪・日田
大東・京都

いのちある句を創れ



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 八月旬会 (大阪市)

8月7日 午後6時
会場——千日前自安寺

今夏は記録的の暑さで、#考える#力も参ったか、総体的に入選句がいつもよりすくなかった。作品の「夏やせ」はいただけない。

清水白柳氏の柳話は、真実と事実のちがいを説かれ、生活感情をよく詩的に燃焼させ、もって句に生かせば、かならず選者の胸を打つてであろうと、経験豊富な実作家が語る川柳訓であった。

全披露がおわってから、青森—東京の旅行談をちよびり披露された主幹は、ますますお元気で、主幹にかぎり「夏やせ」はお見受けできなかつた。

八月の不朽賞杯は名手小川恒明氏の獲得となったが、吉田圭井堂氏の二回を迫つていよいよ後半戦にはいった。

来月は川柳懇句会である。川柳人総出の月である。ご健吟を祈る。(F)

出席者—路郎・水客・紫香・薫風子・正一・黙平・圭井堂・奈良子・清風・舟遊・八郎・静馬・白柳・圭水・雄声・多

久志・すゝむ・柳宏子・庸佑・いさむ・いわを・文秋・晃・六童子・静幸・繁雄・進之助・梅里・清人・専翁・生々庵・古方・凡子・和郎・玲人・みさ子・阿茶・一三夫・少女・季貴・南宗・恒明・栗・宏子・葎乃

兼題「石垣」 麻生路郎選

石垣の苺ルビーにする冬陽 生 薫
石垣を残して今は文化財 清 風
石垣とも知らずに蕨はからみつき 梅 里
蟹親子石垣出たりはいったり 句 念 坊
一将の功石垣が残るだけ 井 平
石垣の外から平はおじぎだけ 一 十
昔古りて石垣旧の武家屋敷 繁 太 郎
石垣が家を小さくみせている 判 志
石垣があつて娘が嫁き遅れ 和 郎
石垣は知る大阪城の恋と剣 宏 子
石垣の此処が城趾かすすき 原 晃
石垣のくすれたままに貧乏寺 晃
石垣の蛇にガイドの声かすれ 静 馬
石垣に一輪だけの白い花 南 宗
石垣に異論教授と文部省 玲 人
石垣の基礎だけ出来て家建たず 季 貴
石垣の上からゆうゆう用を足し 一 鶴
まげもののロケに石垣借りられる 八 九 寸
石垣が崩れて未亡人がすみ 舟 遊

兼題「背中」 松江梅里選

背を向けてよい話きく娘のえは 野 迷 路
昔番号だけでファンは知つてくれ 一 鶴
夫の手甘えて借れる背チャック 生 薫
汗拭いて広い背中がたのもしい 一 十

病名を決めた背中の聴診器 玲 人
背の中へアエスクリムが溶けかかり 六 童 子
女兒既に背をむける術を知り 八 郎
刺青の背中也尾羽打ち枯し病み 生 薫
背中だけうつつて大部屋ロケもすみ 和 郎
一発を打つて背中を叩かれる 玲 人
さんざ無理言うて疲れて寝た背中 黙 平
始末書を書いている背中みつめられ 水 客
一度背を向けりや男というものは 薫 風 子
たたかれた背中友情あたたかし 奈 良 子
背中までむきだしにしてアッポード 晃
お鈍子の出るまで背中つんと立て 生 々 庵
粉白粉背中半分弓にぬり 阿 茶
背中には期待を担う子が眠り 雄 声
見え透いた嘘に背中がむずがゆく 圭 井 堂
人柄が背中と共に丸うなり 一 三 夫
意地張つて背中合わに寝る喧嘩 凡 子
合宿が背中あわせに寝て秘策 進 之 助
高い方を瀾み放さぬ背中の子 黙 平
眠むられぬ夜の背中に老を知る 生 々 庵
上役の背中へお辞儀しているぜ 薫 風 子
刺青の背へ若き日の行状記 六 童 子
背中だけ見てりや頼りになる夫 正 一
西瓜の種つけて寝起きい背の中 水 客
かゆい背へ届かぬ妻の手を叱り 柳 宏 子
金星へ背中うちらしい音を立て 一 三 夫
拗ねている背中つつけばはねかえし 梅 里

兼題「水」 若本多久志選

世界新へいどむ若人の水しぶき 庸 佑
あきらめる心のさざし水を飲み 薫 風 子
はめられた隣へこども水を撒き 静 馬
走つてく方に水ある停車駅 白 柳
おしゃべりの話題がふえた水不足 恒 明

断水が教える水の使い方 玲 人
水かけて拜んでからの法善寺 圭 井 堂
両親の手にぶらさがる水溜り 梅 里
水打つて心と別な描き眉毛 六 童 子
取り込み小鳥の水も忘れられ 文 秋
きげんよく水が働くと発電所 清 風
水清く魚が住めない世を嘆き 一 三 夫
クーラーの部屋で水蒸き通される 圭 井 堂
水鉄砲日頃のうらみも含み 句 念 坊
酔いさめの水しとやかにかしつかれ 奈 良 子
うたかたの水は止まるや人は老い 進 之 助
水くぐる海女のヒツパヘカッ追う 一 三 夫
汗になる百も承知の水水 恒 明
方言も憶えて水に慣れ始め 和 郎
行水ですますレジャーもいらし 恒 明
滝にして池へ戻している仕掛け 八 九 寸
水族館平穩無事の水を替え 文 子
山上でご利益のある水をのみ 白 柳
功成つて帰る故郷の水うまし 梅 里
有罪が無罪か水を打つたよう 圭 井 堂
打ち水が飛び上がるや白い足袋 生 々 庵
水で死んだ子の名で供養して帰 水 客
近々に人手に渡る庭へ水 黙 平
真直ぐに生きて冷めた水が好き 舟 遊
水かけてかけて魚屋売れ残り いさむ

兼題「不意打」 金井文秋選

ドヤ街の寝込み麻葉の夢破る 梅 里
信じられぬこゝで友の死を聞けり 晃
途中下車して無口の父を喜ばせ 水 客
疵持たぬ脛は不意打ちびくつき 繁 太 郎
不意打に左遷の辞令渡される 紫 香
調べ室不意を衝かれて目のやり場 六 童 子
朝っぼから集金来るとは知らなんだ 静 馬

ジャングルの依が帰省するしらせ
 だらしなや寝込みとはいふホスの顔
 不意打の筈がもぬげの空だった
 不意打に座禪の尻がとび上がり
 不意打へ居留守かつた生返事
 電報ぐらい打てと片親涙ぐみ
 不意打ちの悪友まんまと留守を食い
 不意打の一目暮盤の色を変え
 不意打をバックミラーに救われる
 不意打ちの平手男の情に触れ
 不意打が社長定時に出勤し
 不意に肩たたいて笑う高利貸
 寝呆けてる顔へ突出す逮捕状
 悪趣味の不意打ち愛の巣があわて

席題「昼寝」 正本水客選

ニコヨンの昼寝涼しい蟬しぐれ
 寝足りない昼寝あやして泣き出され
 ぱっちりとおきた昼寝へ次の駅
 夜生きる昼寝と知らず炎やませ
 昼寝してしない人よりよく寝ぎ
 鉢巻をしたまま土工昼寝する
 昼寝の時間そない上手にねられへん
 西陽すだれをこして昼寝にとどく
 昼寝したまま晩酌の席となり
 公園の木蔭で四五人する 昼寝
 眠むそうなお経に昼を起こされる
 窓ぎわの昼寝へ西陽差し始め
 お昼寝が名高うなつて人は来ず
 手が届くまで女昼寝を平気なり
 昼寝する時間へ客が来てねばり
 まだ昼寝の続きのよき事を言い
 鼻に汗かいて昼寝も来じやない
 番犬に昼寝をさせている 暑さ

進之助 圭井堂 和郎 和郎 凡子 水客 阿茶 一鶴 生薑 多久志 句念坊 文 秋

みな昼寝我が家の狭さ知らされる
 昼寝から起きてもすることがなし
 夏やせを嬉しく見てる鏡掛け
 夏やせに効くたべものは食べつくし
 夏やせを育ちが違ひますと擲揀
 羨も夏やせしたいわと適令期
 夏やせへウエストサイズを作りかえ
 夏やせを鰻もビールも追いつかや
 夏やせにABCのさじかげん
 夏やせをしてアルバイトの子が帰り
 夏やせへ眉をひそめる里の母
 やせたでしよ腹せたでしよと夏をい
 時代逆行古風にも 夏をやせ
 せめて夏でもと思えどやせられず
 夏やせやおまへんとも細うおまんねん
 夏やせがうらやましいとビール腹
 夏やせをせぬ体質をうらやまれ
 夏やせで夏座蒲団のよさも知り
 夏やせで去年の服が間に合わず
 夏やせを小梅姐さんけなるそう
 パパだけがやせて今年の夏終る
 夏やせのままゆきたい娘のねがい
 夏やせが不治の病いと気がつかず

進之助 水客 恒明 水客 いさむ 玲人 黙平 八郎 庸佑 生々庵 進之助 阿茶 水客 黙平 雄声 八郎 奈良子 庸佑 正一 みさ子 一三天 清風 進之助 圭井堂

席題「ドライブ」 橋高薫風子選

バス抜いて抜いてドライブ快適な
 ドライブの妻にも腕を見くびられ
 郊外へ出るまでドライブ気がつかれ
 ドライブへドライブスクの乗り心地
 女の子乗せてドライブ得意そう
 人目にはドライブに見える医者稼業
 ドライブに今夜は違う女乗せ
 ドライブに今日父ちゃんのプロハンツ

紫香 舟遊 柳宏子 六竜子 すゝむ 生々庵 多久志 生々庵

ドライブへまとも夕陽あたりだし
 ドライブパー借りた車だから飛ばし
 ドライブに午前一時も二時もなく
 ドライブと言えば生々する息子
 新車買ひドライブ一泊どまりにし
 お茶映画ドライブまでときつける
 日焼けせぬ側にドライブ妻の席
 取り立てのドライブだけに決めかねる
 ドライブの後の声に気をとられ
 制限を守るドライブつまらなく
 ドライブパーのネチケツトなきまなら
 ドライブに行こうへ女弱かりき
 ドライブで故郷へ帰るうらみ
 行けるだけ行ってドライブ戻つて来
 ドライブの車をとめて海へ入り
 ドライブの事故から人気の出た女優
 ハンドルを交代でゆく家族づれ
 サンダルで出たドライブが帰らない
 十二月ドライブに出る人もあり

古方 文秋 圭井堂 雄声 圭水 古方 文秋 梅里 紫香 晃 清人 阿茶 水客 柳宏子 六竜子 水京 文秋 寿美司 風仙洞 清子 句念坊 白柳 眉水 はじめ

川維 玉造支部句会 (大阪市)

シヨックから抜けず無口な日が続く
 不渡りのシヨックがある茶碗酒
 ライバルの結婚落ちついてられず
 やつと売りつくし魚屋宵となり
 宵つばりいつか夜食がくせになり
 宵の点呼すましてからのぬけあそび
 裸婦の像かけて隠居はモン振り
 昔の絵に指さす子には手を押さえ
 お隣りの風呂は裸のまま 帰り
 本当の男の 値打ち 知る 裸
 シャツ脱いだ背へ若き日の行状記

西出一栄報 柳宏子 六竜子 水京 文秋 寿美司 風仙洞 清子 句念坊 白柳 眉水 はじめ

37年度金出席者 (八月現在)

和男・圭井堂・一三夫・文秋・清風
 ・すゝむ・柳宏子・薫風子・庸佑・
 静馬・生々庵・舟遊・梅里・阿茶・
 雄声・いわを・季費・宏子・霞乃

天位受賞者

⑥水客⑤文秋・生々庵③圭井堂・一
 瓢②三司・圭水・好郎・静馬・一三
 夫・晃・恒明・進之助・客遊子・雄
 声庸佑・柳志・白柳・阿茶・榮・和
 郎・梅里・多久志・正一・舟遊・
 いさむ

不朽洞賞杯受賞者

②圭井堂①圭水・一瓢・静馬・文秋
 ・多久志・恒明

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

口喧嘩最後はやっぱり物を投げ 宇佐夫
 口元で我慢している 短気者 京四郎
 男の子だ泣くなど我慢強いられる 一栄
 身から出たさびと奥歯かみしめる 呂人
 我慢して身重になって戻つて来 あいき
 折檻が我慢強さを持って余し 珠笑
 貧しさになれて我慢と思うとらす 正一

金井文秋報

婦省して一家困嬾国訛り 狂二
 ゆきずりの御国なまりをかりかたり あいき
 御用聞き訛りで得意今日も出来 万里
 貫祿はもう国訛り苦にし てず 恒明
 腹立ててうっかりしゃべった国訛り 静馬
 盆踊り囀扇の波はおさまらず 双来

母がした通り困窮で子を寝かせ 正一
 信者綱強味に乗って立つ政治 專翁
 腕に職持ってる強味高ういる 奈良子
 別れてもいいわと女職を持ち 文秋
 毛虫だといわれて箔がつく気なり 一三夫
 ツイストの形で毛虫踏みつづし 生薑
 水蜜桃毛虫なんか肌ゆるし 八郎
 徐行徐行一直線にゆく毛虫 恒明
 毛虫にも有った抵抗丸くなり 宗義
 手枕でごろごろ独身寮に雨 清人
 手枕に時計コチコチひびくなり 喜仙
 手枕をもう妻知らん顔でたち 柳宏子
 手枕の女正体見せはじめ 小松園
 窓しめてから手枕を膝にかえ 梅里
 冗談もでて困交の山が見え 良
 冗談へ真顔の一人ビエロめき 文子
 くだいてみても冗談にされる 齢好郎

川雑 淀川支部句会 (大阪府)
 木村水洞報

川雑 ハワイ支部句会 (ハワイ)
 築山快夢起報

卒業式ママが一番嬉しそう 須磨子
 気兼ねして母さん安い方を買ひ 細香
 すすめても気兼ねにちらまで気兼ね 平八郎
 もしもしと受話機を持ってまで気兼ね 緑星
 気兼ねすりや又もチャンスは左様なら 紅茶
 美しい出戻りが居て気兼ねする 浅太
 気兼ねなどするなは外交辞令です 柳葉
 別居して気兼ねいらぬの茶を吸り 万里歩
 子が出来て義母へ気兼ねい忘れ あき坊
 気兼ねない欠伸うつして親しまれ 笑有
 気兼ねして食べるで飯の味のなさ 笑有
 養老金で年に気兼ねのない暮し 弦月
 気兼ねして通れば小石にけつまずき 拜山

川雑 出雲支部句会 (出雲市)
 尼緑之助報

消えかかる斗志かきたて屋台酒 晃男
 もう初夏を着るマキエンに足をとめ 好江
 そこいらで止まってくれね我が斗志 三郎
 上向いて歩こう初夏の雲が湧き 重信
 斗志ふと疑問に思ふ赤いハタ 壮
 スト妥結大工場は煙吐く 芳正
 雑草の如き斗志で今日の地位 岬月
 乗車してからウナ電読みかえし 緑之助

川雑 備前支部句会 (岡山県)
 横山一声報

老夫婦桜に遠く庭をはき 久米雄
 お茶漬の味がわかって来た夫婦 佐加恵
 平凡にくらす夫婦にじむ味 三平
 ロマンスを笑って語る老夫婦 九波
 革新と保守に夫婦の票を分け 秋月
 夫婦だけにわかるサインとは知らず 綱織
 綴り方子のない夫婦が読んで泣き 始ん坊

公務署が来て居る時に客がこみ 胡風
 御亭主に子守りをきて客が混み 明良
 繁昌へ看板娘が嫁きおくれ 三六
 繁昌を頼む神さま繁昌し 水仙
 繁昌にくちをこぼしつえびす顔 米男
 床の間に光りお家も繁昌し あやめ
 繁昌を計算してる他人の目 鮫虎狼
 よこしまな恋はずかしい日本晴 芳月
 日本晴せんべぶとんがよくなる 桃里
 日本晴れのような心を持ってと言う 一郎
 日本晴れ困地の上はひるがえり 博友
 表彰を日本晴れの顔で受け 哲郎
 日本晴れ南の空はきこの雲 寺百
 日本晴れ富士はかすみがあるばかり 東岸
 恋を得た心はいつも日本晴れ 宗義
 庭石のつらの悪さを自慢なり 一宗
 むしやくしゃの心を日本晴れ向け 美舟
 日本晴れ入学許可の通知つき 草二

川雑 米子支部句会 (米子市)
 小西雄々報

思案するとき指鳴らす嘘をもち 雄々
 儲けより使わぬことで息をつき 素
 静かなる砂丘に言葉が湧いて 天邪鬼
 腕の差と別給料は同じ額 詩郎
 銭湯で子を室ほど磨き合ひ 一郎
 つれづれに写し鏡で白髪抜く 典女
 酔態を描写した子の綴方 蛙眼子
 豊繁期髪をなでるも水鏡 まさよ
 菓つかみ心地はだして百度踏む 節枝
 臨終の写真涙とともに撮り 無閑
 引越の荷物の上で猫をだき 一笑
 商売の不振稅務署知ってる 秀峰
 かさばった荷物のかげで小さくなり 福女

食品と科学

食品と原材料・機械・包装の総合誌

9月号発売中 150円(千18円)

特集

1. インスタント食品特集(1)
2. 何でも喰ってやろう(座談会)

◇ 海外ニュース ◇ 特許ニュース

◇ 意匠ニュース ◇ 商標ニュース

【展望台】主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

食品と科学社 大阪6702番

叱られたお礼ものべる謝恩会 一保
川雑 木次支部句会 (島根県) 藤井明朗報

一周忌過ぎて子連れにいい話 古坊
さよならが言えずキムの隅の人 昌
歩いて歩いて別れ話を持ちかける 鶏声
お別れの車窓に残る切れテープ 清泉
街録へ子連れか強い意見述べ 利徳
相性が合わず別離の歧路にたち 祥月
日曜の団地子連れの朝の列 栄治
一汽車をおくれ別れはまた尽きず 明朗

川雑 岡山支部句会 (岡山県) 浜田久米雄報
ストの日へ助役の改札ぎこちない 秋月
昼休み今日は助役が墨を持ち 船ん坊
何事も見透しそうな助役の目 虎狼
助役さんもうろく章はくたびれた 日呂志
助役まで来た年齢を振りかえり 宗義
芸事も覚え助役の腕が冴え 博友
異動期に助役をそわそわ落ちつかず 陽子
助役には言い度い事も言えらるなり らんる
叱責の役は助役にまかせられ 佐加恵
土壇場になつて助役の智慧を借り 怯友
部下の気が助役になつてからわかり 幽谷
陳情が今日も助役にあしらわれ 九波
助役には届かぬとこでささやかれ 久米雄

川雑 宇部支部句会 (宇部市) 津秋六花報
乗越しが駅長室で茶をよばれ 山峰
乗越が駅のベンチへ朝を待ち 呉浪
乗越しがおまけに切符までなくし 南風

隣席の美女へ乗越したくなり 万年青
乗越しは美人に見とれたと言えず 実男
乗越して歓迎陣を慌てさせ 山峰
乗越が一番列車で戻って来 弘道
乗越しへ周囲の客の目が集い 万年青
終点のあれも乗越しらしい客 実男
乗越しに気付いた途端アッ解け 東村
乗越しが荷物忘れの程あわて 六花

川雑 大鉄支部みなと句会 (神戸市) 植村客遊子報

タイミング合せて朝を出る若さ 播一
息引取ってから満足な顔となる 白李
満足に歩けぬうちから靴を買ひ 初甫
栄転へ夫婦で見送る恩があり 白溪子
茶柱へ話題を変えタイミング 杜的
まだ恩をかえせず仕事に精を出す 千津子
酒の宴なれぬかけ持ち酔つづれ 賀人
かけ持ちでうれい酒を飲まされる 客遊子
日雇をして満足な子の育ち ただし
子を持った満足感を土台にし 惣太郎
満足しきつた余生訛りが板につき 万的
アルバムで旧師の恩を想い出し 季笑
タイミング合せてからの茶を練り 季賛
すつとんとんとつた日の夢の笑顔子の笑顔 有法子
赤チンと包帯で子は満足し 美由起
水菜ついのみすぎるあまい味 修二
つばめの菓母の無い子の眼に無い 水客

川雑 土佐支部句会 (高知市) 川竹松風報

金持ちの悩み不肖の子が揃い 有岡
金持ちへ金が目当の浮気する 古城
金持ちに金が貯っていくしかけ 温夫

金持ちに生れ世間を甘くみる 醉柳
成績は中だが気だて優しい娘 十面子
フラッシュの中に勝利の手が上り 柳翠
発育も知能も中で物足らず 勝子
弟に泣かれ兄には叱られる 利子
中肉中背オライメイトでこが足り 水客
この俺を以下何名の中へ入れ 山里
真ん中で写す恩師も嬉しそう 幸葉
庖丁に生きる自分の手を見つめ 三吉
庖丁の今日は目出度い鯛にふれ 勝喜
庖丁の錆がトーフへついでくる 斐山
庖丁も持ちようによりこわく見え 義夫
それぞれに団地俸せ窓灯る 大柳
入試前窓の灯はまだ消えず 天花
平凡な生活の中の明い窓 泉
愛嬌が有って窓口繁昌し 一人
丸窓の風情は知らぬビルに住み 桂緑
丸窓の好み作家の旅靴 風舟
独房の窓ふるさとへつづく空 アパー
アパーと呼べ窓から顔を出し 喜怒
無駄口をたたいて針の手はおろす 寛
無駄のないくらしハレビまだ買わず 是江
決算へ時間を無駄にさせるミス 喬村
リヤカーで来て一票を無駄にせず 青果
困ったら米いの善意を無駄にせず 勝喜
ハンカチも汚れたままの独り者 勝子
ハンカチの名前が太い幼稚園 和泉
筆はこびいづもの母と違う文 古城
上書きは代筆と知る母の又 海鳥
代筆で母の意見も書きそえる 斐山
代筆で来る代議士の見舞状 山
別居すりや他人の口がうるさく 勤
分けた子が別居の様子さぐりに来 是江
マネキンの引き立つ様な顔へぬり 大柳

流行のトップマネキンよく生かせ 天
マネキンに似合い私に似合わない 常香
マネキンのモデルにされたまま帰る 松風
マネキンの素肌へ出会いはつとる 寛
杏林川柳会 (大阪市) 中島生々庵報
海千が財布まかされひつかかり 阿茶
すられたと気付いた時は食ったあと 五十六
種ゼニも入れて財布のプレゼント 生々庵
紐つきの財布懐中奥深く 一伸
財布マニアお金にわりに持っていず 野迷路
長旅へ小出しの財布別に持ち 小石
冷蔵庫一升瓶が邪魔がられ 一哲

南海電鉄川柳会 (大阪市) 辻圭水報

台言葉三者に知れて仲が割れ 宏子
日本晴れ徐行の鉄則忘れ勝ち 八郎

品質優良
先洗カワチ
TACHIKAWA PEN
立川ペン先株式会社
大阪市東区常盤町一丁目十一番地
タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

我人生徐行ばかりでけがはなし 雄声
子がきて徐行運転板につき 和郎
徐行して女の顔をそっと見る 圭水
徐行の窓に見おさめの母の顔路郎

コクヨ川柳会

(大阪市)

川口理休報

橋一つ郷土の観光背負ってる 柳波
ライオンも哀れ扱りの浪速橋はたる
下積みは気が楽ですと言つてみる 留鈍
此の次はお一人でねと謎をかけ 昭一
エチケットだけで生きてる味気なさ 理休

明和川柳研究会

(西宮市)

樋口舟遊報

古着屋に紋のめでたき問わねり 新子
皇国の象徴裸せし菊の紋 悠紀
人を呑んでも石を呑んでも池の波紋 夢虹
紋章のあたりし船出に風があり 舟遊
桐の紋人情とみに薄れたり 晃
構想の中途机の位置を変え かつみ
行楽客お金とこみを置いて去に 菁風
風船の空気恐わこわ入れてみる 梅志
感傷にまだ愛着をもつ弱さすむ
慰謝料に感傷はもう交って 薫風子
幸福な女肉体油めき照児

富柳会句会

(富田林市)

阿部柳太報

あの人は虫も殺さぬ顔をしてふじ
貢ぐだけ貢いだ恋を裏切られ 東雲楼
恋人のため裏切った暗い春紅月

糟糠の妻を裏切る金が出来 六童子
裏切つてからの彼女は路地で住み 摩天郎
裏切も良心があり寝つかれず 圭水
明治の女一筋の恋に生き 静林庵
一筋に愛されるのもしんどおす 美代
一筋の恋天国で添います とも子
一筋の線香悲しい通夜の鐘 勇三
年金に触れて呑気でない夫 はじめ
長男の呑気気にする糖尿病 きはち
核実験ここ日本は花見酒 雄声
あのこぶも一緒に棺におさまった 幸吾
子の喧嘩瘤のない方泣いており 八郎
橋下の住いも目上の瘤が居り 吉太郎
青い空ばかりながめて病んでいる 一義
青い空春天国は猫の恋 勇三
青空を突き刺すように舞う雲雀 呂人
銀輪に歌あり今日の青い空 六童子
いつるか世界平和の青い空 紅月
告白をして人柄を見破られ 正倫
告白を他人ごとの様にするも老 八郎
告白をすればすまない人がおり 東雲楼
神様に告白をして嫁にゆき とも子
今だから言うと言説覆えし 雄声
人相を見るひげづらのいやらしい目 将鴻
うらないの女難の相に気を好くし 静林庵
うらのそでと社長は手をにぎり 美代
おみくじに命をかける恋心 吉太郎
うらないと違う結果に寝つかれず 圭水
告白が家庭争議の種をまき ともみえ
告白を聞いて対策たて直し 周一

丸紅飯田川柳会

(大阪市)

川村好郎報

横文字の宿題親がもてあまし 北斗
日本語もよわいくせしエニス・ノー 大樹
横文字の処方箋が気にかかり 好郎
老夫婦花火に興じ対浴衣 福寿
踊りの輪浴衣もそろう気もそろう 瓢太
夕顔が咲き独りが惜しい浴衣がけ 美幸
おしゃべりが噂の主が来てとまり 泉北
内心をかかすおしゃべりとめどなく 立見

羽曳野どんぐり川柳会

石川太柳報

ママゴトの酌するとき母に似て 雄扇
洗たくにため息もらし母懐う きよし
なりふりをかまわぬ母で子は育ち 頑柳
ハネムーン母上様と初便り ひろし
母だけを信じきつてる子の寝顔 弘志
良好の診断母に先ず知らし 草春
嫁った娘の写真眺めてはげまれ 宝泉
今は亡き母の傘だけチリ積り 楽人
鉛筆の噛む齧直らず母なき子 紀太呂
おきまりの正義で叱る母老いし 悦三
母の知恵子供の知恵には追いつかず 計雄
母ものに泣く涙ありまだ不孝 万竿
僅かなる母の蔵書に川柳誌 蓮太呂
子の咳に母も目覚めて咳貫う 痴亭
倦怠期喧嘩しいしい母となる 二三雄
私の母曾つて賢母の誉あり 満明
故郷の母乗せてタクシー御堂筋 静波
啼りて来た様に抱いている若い母 与太郎

意見する母の臉に光るつゆ 力郎
平凡を求めゆるえの四苦八苦 鐘笛
平凡に勤め汚職はまだ知らず 正雄
平凡な暮しに見せて火の車 弥生
平凡な子でよいと口は言い 美忘
平凡な話ふわふわ恋たのし 雄峯
平凡に夢を託し凡父の老けるのみ 太庸
平凡な事にも野党は難をつけ 紫貞
平凡に別れられない春の宵 鈴子
平凡な暮らしがしたいというれのこと サエ子
平凡な家庭を乱す紅がつき 美郎
平凡ですといつも名句を没され 忠雄
日々好日凡父凡母の子と生れ 幸平
初恋は平凡すぎてもならぬ 黄昏
平凡な半生しかし悔いはなし みどり
平凡に徹して退院 近うなり 春生
平凡な亭主時には阿呆に見え 朱美
平凡に生きたい望み抱いて病み のん子
初デート手もとふれあう帰道 柳也
停電にさぐる手元の空マッチ 夕月
魔がさして手もと震える勝負札 花風

宴会・出張パーティ・折詰弁当

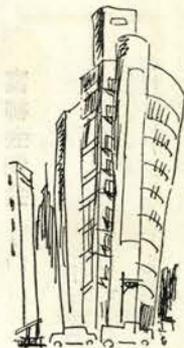
梅里ノ店

大萬

料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL(七七)三九三五番

館の店 アベノ橋近鉄地下食通街
TEL(七七)〇一四七番

串の店 千日前 大劇裏
TEL(六三)二七一〇番



柳樽室

★残暑がいつまでもきびしいようです。ご健勝をお祈り申上げます。★比較的夏に強い私は七月二十日から青森・仙台・東京の旅をして来ました。その方面で多数の柳人にお目にかかりました。いろいろご厄介もかけました。感謝いたして居ります。★青森は新聞社のお招きでまいったので、その方面の記事は工藤甲吉氏が執筆寄稿されましたので、迂生は「道草」を書きました。何分スペースを十分にとってなかつたので、東京で会った人たちのことを少し書きたかったのですが、ウンと省略したのになつてしまいました。ご笑読を願います。★秋に入ると、何かと忙しくなります。大阪市民文化祭の川柳大会もその一つです。出来るだけ盛んにしたいものです。協力方をお願い申します。★短評文学文庫の事についても、旅先でも協力方をお願いして来ました。★十月初旬に又仙台と東京へまいります。東京は今度の旅で会えなかつた人にも会いたいと思つて居ります。何んしろ宿に根をはやしては会いたいというので、すからゼイタクかも知れませんが、東京というところは会いたい人たちに会うのは少し広すぎます。★こんどの旅行で気がついたこと

ですが、私は毎日パンを少し喰べただけですから、ご馳走のご心配はなさらないようにと前もつてこつとわつておいたところが、どこでも洋食料理でおもてなしくださつたことでした。これは常識的なお心づかいで恐縮の外ないのです。が、私としてはパンの少量以外では殆んど喰べないことを言つたので、尤もそちらさまは洋食でも和食でも自由に召し上がつていただければよいのです。私はビール一本、タバコ(ハイライト)二個、それに少量のパン、チーズ、果物、時に味噌汁ぐらいで一日の食事は足りるのです。時にはビールの異変で雑誌の発行が遅延いたし、各方面にご迷惑をおかけしました。旅へ出るので、いつもより早く原稿を送りこんであつたのですが、現実はいつとも遅れた始末、何ともお詫びの言葉もありません。印刷工場も今後善処するよ

うに申して居りますのでご寛容のほど願ひあげます。遠くは金沢あたりから電話でのトクソクには首のちぢまる思いがいたしました。しかしそれほどの熱心さで読んでいただいていることを知つて感謝いたして居ります。(路郎)

▼ベンの散歩▲

▼前号はいつもより原稿の集りがよかつたので早く出せるとおもつていたのに、印刷所の故障でサンザンな目に遇つた。「迷惑をかけない運動」中だが、読者の皆さんにヒドイご迷惑をかけてしまつた。ボクもおかげですつかり面目を失つてしまつたが、とにかく氣

をとり直して九月号に全力を傾けた。▼九月号は多彩な好読物がそろつた。▼ソ連の宇宙ランデブーはスゴイが、また来た台風シーズンヘナンの手も打てない科学陣にはコチラがお手上げだ。(一三夫)

飛燕往来

☆河村瑞川氏より

一 露部・晴乃苑

六月十八日ロスアンゼルスに飛びました。驚いたことに黒人が非常に多いことです。私達は余り白いで気がひける位です。ここでは一寸いける男前の方です。黒人の女性にウインクされはしないかと競々としていました。一日ロングビーチを見物しました。ここは美女のコンタールのある海水浴場だとはかり思つていましたが、石油の大産地で、採油の櫓が立林、精油工場が無数にあり認識を新たにしました。サンタモニカの海水浴場にも行きましたが、広い砂浜一面にパーベキュー用のカマドが造つてあり、日本から伝来の串焼きが今アメリカでは全盛です。ラスベガスは砂漠の中の町で、吹く風の暑さに、昨年エジプトのカイロを思い出しました。公許ギャンブルも二、三試しましたが皆駄目、早々にホテルへひき上げました。以下はホテルのルーム係との会話です。「勿論、ダブルベッドですね。」「ツウーベッドにしたい。」「否、ワン・ダブルベッドの方がより良いですよ。」「私は数年来一つ蒲団に寝たことがないので強硬に一人寝のベッドを

主張すると、「まあ、お気の毒に……。」

私達はこの時一時に若返りました。以上老人には旅をさせの巻。(七月二日、マイアミ・マガリスターホテルにて。)

九月句会—川雑支部

★淀川句会・5日(水)六時、題、疲れ・電報・上品、所、十三西之町五丁目東淀川郵便局、★かがみ句会・2日(日)一時、題、最後・狙う・刺激・謎・和服、所、池田古心居、★明和研究句会・9日(日)一時、題、萩・火山・沈黙・自由吟、所、阪神電鉄鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館、★米子句会

・16日(日)一時、題、発表・歩く・栄養、所、米子市公会堂、★南海電鉄句会・20日(木)六時忘れ物・他人・老眼鏡、所、難波高架下親和クラブ、★みなと句会27日(木)六時、題、無料・故郷・バンドル、所、明石市阿万の居、★阿倍野句会・20日(木)七時、題、私用・氣抜け・シンボル・荒れる、所、松崎町三ノ一〇割烹大万、★玉造句会・10日(月)七時、題、残暑・古木・物忘れ、所、市電玉造南一〇〇米大阪信用金庫玉造支店、★京都句会・17日(月)六時、題、おだてる・折半・英語・火・初めて、所、四条縄手仲源寺

東野大八著

風流人間横丁

仙二五〇円 送費 七〇円

B6型 五八二頁

★異常な競争にまき込まれ隻手となつて帰還した著者のザックパランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄しい。まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。

★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

★送料は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

大阪府住吉区西五丁目二番地

発行所 川柳雑誌社

電話 大阪(671)六〇八一 振替口座 大阪七五〇五〇



★サンブル
説明書贈呈

胃酸過多
胃炎・胃痛・胃潰瘍に…



プロバンM錠

10錠・30錠／★健保適用

大阪市東区道修町 大日本製薬株式会社 (プロバンM錠までお申込みください)

会長・麻生霞乃女史

川柳 婦人友の会会員を募る

川柳雑誌社内川柳婦人友の会

入会希望者は往復はがきで……

連絡事務所 大阪市南区ニッ井戸町23

山川阿茶

麻生路郎著

好評噴々

新川柳観賞

川柳の味わい方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心とする他の柳語や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資するものである。

句の方より尖はその鑑賞文の方がながながうがって、一々に読ませる魅力がある。

価二五〇円
送料八〇円
B6版
二五〇余頁

発行所 川柳雑誌社

電話七〇七七一(天の八)
郵政口座 大阪七五〇五〇

麻生路郎先生著

川柳とは何か

価二五〇円
送料七〇円

川柳の作り方と味わい方

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

外 出 (二回以内) 市場段良子選
恋 (十句以内) 長野文庫選
た め い き (十句以内) 菊田いさむ選
す べ り 込 み (十句以内) 川村好郎選
旅 先 (十句以内) 杉谷尚山選
水 谷 竹 莊 選 (九月十五日締切)

近作柳樽 (毎月廿四日締切) 麻生路郎選
北川春巢選
川柳塔 (毎月十句以内) 麻生路郎選
章 (評論・研究・感想其他) (毎月十五日締切)

投 稿 規 定
▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名推挙を明記する事。
▼ 「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼ 「課題吟」は誰でも投句が出来る。
▼ 「川柳塔」の投句は不朽会員に限る。

川柳雑誌 第三十七年 第九号

定価 九〇円 (送料六円)

半力年 五七六円 (半力年) (禁転載)
一力年一、〇八〇円 (半力年)
昭和三十七年八月廿五日印刷
昭和三十七年九月一日発行

発行所 川柳雑誌社

電話八〇七七一(天の八)
郵政口座 大阪七五〇五〇

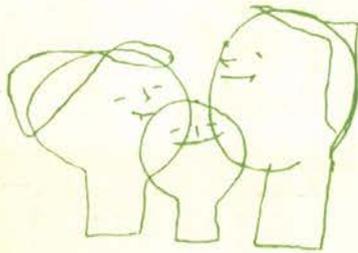
昭和廿七年七月一日 第三種郵便物認可
 昭和廿七年九月一日 発行(毎月一回)日曜日

編集者 山柳雅品

社団法人 山柳雅品社
 〒100 東京都千代田区千代田 1-1-1

大阪市住吉区住吉南 1-1-1 電話 671-2181
 定価九十円(送料別)

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2

水がアイロンかけをする

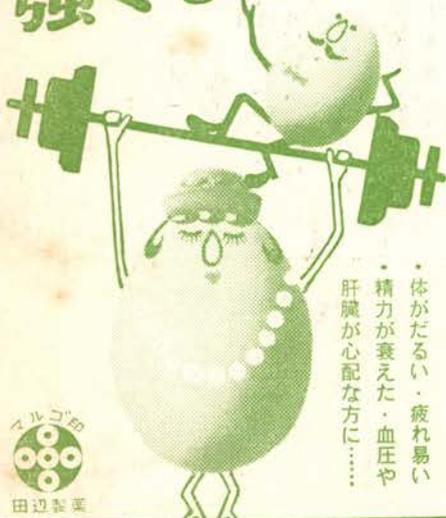
クラボウ

ベルファスト
 セルフ・アイロン・コットン

技術提携先—米国D・ミリケン社
 製造発売元—倉敷紡績株式会社



強くなる... 薬



元気が出る

(内服液)
ヘルスロンクアンプル

・体がだるい・疲れ易い
 ・精力が衰えた・血圧や
 肝臓が心配な方に……



体力・活力・精力

ヘルスロンク

高知/琴平への
 最短コース!

(小松崎へ525円4時間 琴平へ955円6時間40分
 高知へ1095円7時間30分)

なんば発南海ライン

●ゆき

	なんば発	和歌山港発	小松崎港発	琴平発	高知発
(1)	7.45	9.00	11.40		15.09
(2)	10.30	11.50	14.30	17.30	18.05
(3)	14.10	15.30	18.10		
(4)	17.40	19.00	21.40		

●かえり

	高知発	琴平発	小松崎港発	和歌山港発	なんば発
(1)			8.00	10.40	11.57
(2)	7.30		12.10	14.50	16.05
(3)	11.25	12.21	15.00	17.40	18.55
(4)			18.40	21.20	22.35

(641) 8688 0103 9734
 (341) 5038 (251) 8117
 堺(2) 0678 徳島(2) 2240

南海電車